HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第５章　サーミ教育専門学校（Sami Education Institute）の現状と役割
Author(s)	上山, 浩次郎
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 34, 103-136
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61380
Type	departmental bulletin paper
File Information	500_ch5.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第５章　サーミ教育専門学校(Sami Education Institute)の現状と役割

上山浩次郎　北海道大学大学院教育学研究院助教

はじめに

本章では､サーミ教育専門学校（Sami Education Institute）の現状と役割について検討を加える。このサーミ教育専門学校は、ノルウェーのサーミ・ユニバーシティ・カレッジと比較がなされることもあり（Stevenson 2001)、その意味でとくにフィンランドにおけるサーミの教育において重要な位置を占めていると思われる。

このサーミ教育専門学校は、職業教育訓練機関としての性格を持つだけではなく、サーミエリアの需要に応じた教育の提供やサーミ語やサーミ文化の維持発展に関わる多様な活動を行っている。

そこで、本章では、まずフィンランドの職業教育訓練制度の概要の確認（第１節）と、サーミ教育専門学校の制度的な特徴を整理（第２節）した上で、さらにサーミ教育専門学校の教員と学生の生活と意識について検討を加える。それらを通して、サーミ教育専門学校の現状と役割について考察を加えたい。

第１節　フィンランドの職業教育訓練[1)]

第１項　概要

フィンランドの職業教育訓練は、後期中等職業教育訓練と継続職業訓練の２つからなる。後期中等職業教育訓練では基礎職業資格を取得することができる。その資格取得のための学習形態には、基礎学校卒業直後の者を主な対象としたスクールベース、15歳以上の者を対象とした徒弟訓練契約にもとづく徒弟訓練制[2)]、主に成人を対象とした観察などの質的な方法を用いて評価を行うコンピテンシーベースという３つの形態がある。

スクールベースの後期中等職業教育訓練は、一般教育を提供し大学入学受験資格を取得できる高校と並行して学ぶこともできる。そうした場合、おおよそ３～４年程度で学習が修了する。

継続職業訓練では、上級職業訓練資格と専門職業訓練資格という２つの資格を取得できる。上級職業訓練資格は、基礎職業資格を取得後３年以上の労働経験を経てから身につけることができる職業資格であり、専門職業訓練資格は、その上級職業訓練資格取得後さらに２年以上の労働経験を経てから身につけることができる職業資格である（福田 2012)。これら上級職業訓練は、コンピテンシーベースで評価され資格が付与される。

第２項　職業教育訓練行政

フィンランドの職業教育訓練行政に関しては、教育文化省と国家教育委員会が大きな役割を果たしている。

教育文化省は、職業教育訓練を含めた教育政策全般と、職業教育訓練の規制・調整・財政に関し

て責任を持っている。その仕事は、政府が採択した「教育と研究の発展プラン」等によって誘導されている。また、教育文化省は、後述する職業教育訓練を提供する具体的な供給主体にその供給を行う権限を与える。

国家教育委員会は、教育内容の大枠を定めるナショナルコアカリキュラムとコンピテンシーベース資格の要件を決定する。その際には、資格で求められる職業技能やコンピテンスの実演方法に関しても大枠を決定する。

職業教育訓練の供給主体は、主に、地方自治体・自治体連合・登録組織や財団などであり、おおよそ140程度の供給主体が存在している。ただ、少数ながら政府が運営する職業教育訓練の供給主体もあり、本章で扱うサーミ教育専門学校も政府によって運営されている。

このような供給主体は、おおよそ複数の職業教育機関を設置している。職業教育機関では、多くの場合、スクールベース、徒弟訓練制、コンピテンシーベースという３つの形態のいずれでも職業資格を取得できる。

それぞれの職業教育機関には、そこでの教育の責任者としての校長が存在する。また、学生の権利の行使を行う学生組織もある。この学生組織は、職業教育訓練の供給主体における意思決定組織に対して、学生の視点から交渉を行う。

第３項　カリキュラムと教員

職業教育訓練のカリキュラムは、ナショナルコアカリキュラム、供給主体が定めたローカルなカリキュラム、個人ごとに設定される個人学習プランの３層構造となっている。ナショナルコアカリキュラムは、先ほどふれたように国家教育委員会が定め、教育内容の大枠を定めている。ローカルなカリキュラムは、ナショナルコアカリキュラムに即して、職業教育訓練の供給主体が、地域の労働市場等をふまえて設定する。そして、個人学習プランは、教員と学生の相談にもとづき、学生ごとに設定される。

職業教育訓練の教育内容は、後期中等職業教育訓練と上級職業訓練ともに、以下の８つに階層化されており、「テクノロジー、コミュニケーション、交通輸送」「社会科学、ビジネス、管理」「社会サービス、健康、スポーツ」が多くの学生に学ばれている。

・「人文科学と教育」
・「文化」
・「社会科学、ビジネス、管理」
・「自然科学」
・「テクノロジー、コミュニケーション、交通輸送」
・「自然資源と環境」
・「社会サービス、健康、スポーツ」
・「観光、ケータリング、国内サービス」

後期中等職業教育訓練では52の職業資格が存在し、上級職業資格は187資格、専門職業資格は129資格が存在している（2010年現在）[3)]。

後期中等職業教育訓練のうちスクールベースという形態においては、その修了には180単位必要であり、おおよそ３年で修了できる（１年でおおよそ60単位）。その構成は、職業に関する教科が135単位、コア教科といわれる一般教育が35単位、自由選択科目が10単位となっている。また、職業に関する教科には、1.5単位のガイダンスカウンセル、最低２単位の最終プロジェクトが含まれる。さらに、最低35単位は仕事を通じた学習（On-the-job learing）を行う必要がある。

徒弟訓練制は、15歳以上の若者と成人を対象とした学習形態である。それは応募者と雇用主の間で結ばれる徒弟訓練契約にもとづく。そこでは、仕事を通じた学習（On-the-job learing）と、実践と理論の統合が強調され、訓練期間のおおよそ70～80％が指導員（Workplace instructor(s)）のもと職場で行われる。その際には、一般労働者の８割程度の賃金が支払われる（ReferNet Finland 2011）。こうした職場での学習は、職業教育訓練機関などで提供される理論的な学習によって補完される。

コンピテンシーベースという形態では、当該職業資格が求める職業的技能の実演によって資格が付与される。その際には、観察・インタビュー・サーベイ・集団評価・自己評価などの質的な方法によって評価が行われる。評価の主体は、雇用主・労働者・教育機関のそれぞれの代表である。コンピテンシーベーステストへの応募者は、必要な職業的技能の獲得が目指される準備職業教育訓練に参加することができる。それは、必ずしも受講する必要はないものの、多くの者が受講している。

職業教育訓練を担う教員には、学士（大学 or 専門大学）以上の学位、少なくとも３年以上の関連領域での労働経験、教職課程の３つの要件が必要である。職業教育訓練を担う教員へ向けた訓練は、専門大学と連携して実施されている職業教員教育大学において供給される。公的な資格を保有している教員は2013年で79.8％となっている（FNBE 2015b）。これは2005年の72.7％と比べると値が上昇している。ただし、基礎教育の教員のうち公的な資格を保有している者は2013年で89.7％となっている点をふまえると、公的な資格を保有している教員が相対的に見て少ないといえる。

第２節　サーミ教育専門学校の制度的特徴[4)]

第１項　概要

サーミ教育専門学校は、サーミエリアに必要な教育を提供すること、サーミ文化や自然にもとづいた職業を維持発展させること、サーミ語による教材の作成を促進させることを目的とした機関である。

こうした目的のために、サーミ教育専門学校は、多様な職業教育訓練を提供する後期中等教育レベルの機関としての性格を持つ。それは他の職業教育訓練機関と同様、若者だけでなく成人も対象としている。教授言語はフィンランド語かサーミ語である。ただし必要に応じて他の言語も教授言語として使用可能である。

また、サーミ教育専門学校は、国内国際両方のレベルにおいてサーミ文化・サーミ語・サーミの生活様式の促進を図る活動に関与してもいる。たとえば、サーミ語やサーミ文化に関する学習プログラムの提供やサーミ教育の教材の作成などを行っている。その際には、ラップランド大学やオウル大学、さらに北極圏の高等教育機関との連携も行っている。

さらに、サーミ教育専門学校での教育を支援するような、もしくは教育と密接に関連するような研究活動・サービス活動などのプロジェクト活動を行うこともできる。たとえば、サーミ語の学習プ

ログラム等を提供するヴァーチャルスクールの発展や推進がプロジェクト活動を通して行われてきた。

サーミ教育専門学校は、自治体や自治体連合などによって設置・運営されることが多い職業教育訓練機関のなかでは珍しく政府によって運営されている。イナリにメインオフィスと２つのキャンパスがある。また、イヴァロ、カーマネンのトイヴァニエミ、エノンテキオのヘッタにもキャンパスや関連施設がある。

このサーミ教育専門学校は、1970 年代後半に設立されたと見てよい。なぜなら、前身組織としてのサーミ地域伝統職業教育センター（Sami Vocational Education Center）が、1977 年のサーミ地域伝統職業教育センターに関する法律をうけて設置されたからである（吉村 1993）。フィンランドにおけるサーミの教育が 1970 年代から開始されたとみなされる点（第４章）をふまえると、フィンランドにおけるサーミの教育の始まりから存在している機関といえる。その当時、機関の主要な課題は、「消滅」の危機にあるとみなされていたサーミのハンドクラフトの教育であったという（Stevenson 2001）。その後、1993 年のサーミ地域教育センターに関する法律をうけて（吉田 2005）、サーミ地域伝統職業教育センターは、イヴァロのホームケア学習センター、イナリのクリスチャン民衆高等学校と合併し、現在のサーミ教育専門学校となった（Svein 2000）。

第２項　組織

サーミ教育専門学校の管理運営は評議委員会が行う。評議委員会は４年ごとの選挙で選ばれる 11 人から構成される。そのうち、ラッピ県議会が８人を任命する。残りはフルタイムの教員から１人、他の職員から１人、生徒から１人が選ばれる。ただし生徒は少なくとも１年の任期である。ラッピ県議会が任命する８人のうち６人がサーミ議会から任命され、そのうちの少なくとも１人がサーミ地域の自治体（エノンテキオ、イナリ、ソダンキュラ、ウツヨキ）の代表者となるようにする。

教育組織の長として校長がいる。その校長は、上記の評議委員会の事務も担う。また教頭も１人存在している。教員は 34 人、事務･寮の管理などその他の職員は 28 人存在している。またプロジェクト活動を担う者が５人いるがそのうち１人が教員と兼職である。また、ヴァーチャルスクールを担う職員は６人いるがそのうち専任が３人となっている。

学生組織も存在する。学生はその組織に自動的に所属することになる。その代表機関は年に一度９月に選ばれる。この組織の目的は、学生の学校での活動と交流を促進することにある。代表機関は法律に即した言論の自由を行使できる。法律では、サーミ教育専門学校は、学生に対して、学校の発展や教育水準の向上に関わる機会を提供する必要がある。加えて、学生は、学生の地位や学習に影響を与える意思決定を行う前に意見を聴取される。

第３項　教育内容

サーミ教育専門学校は、前述したように職業教育訓練機関であり、職業資格を取得することができる。それを表５－１に整理した。基礎職業資格に関しては、「クラフトデザイン」「自然環境サービス」「ホテル、レストラン、ケータリングサービス」「ビジネス」「ソーシャルケア、ヘルスケア」「ツーリズム」の職業資格を取得することができる。これらは、基本的にはスクールベース、徒弟訓練制、コンピテンシーベースという３つの形態で学習することができる。

「クラフトデザイン」のなかには３つの学習プログラムがあり、そのうちサーミ文化に関連するものとしては「サーミハンドクラフト（ハードマテリアル：木材、骨、トナカイ角など)」「サーミハンドクラフト（ソフトマテリアル：毛皮、革など)」という２つの学習プログラムがある。また、「自然環境サービス」のなかには「トナカイ飼育」という学習プログラムが存在している。そこでは、現代的なトナカイ飼育者として必要な飼育、食肉加工、販売などの多元的な自営業者としてのスキルの形成が目指されている。

上級職業資格と専門職業資格に関しては、「トナカイ飼育」と「サーミハンドクラフト」に関するそれらの資格を取得することができる。

サーミ教育専門学校では、こうした職業資格だけではなく、主に成人を対象としたサーミ語とサーミ文化に関する学習プログラムも提供している。具体的には「イナリ･サーミ」「スコルト･サーミ」「北サーミ」の３つの学習プログラムを提供することが可能である。それらの修了には 40 単位が必要であり、おおよそ１年程度で履修が修了する。学習は初心者コースから始まり、それゆえ事前の学習は求められていない。はじめの教授言語はフィンランド語であり、授業が進展するとそれぞれのサーミ語が教授言語となる。これらのうち「イナリ・サーミ」と「北サーミ」はオウル大学のギエラガス機関が提供する学習と対応している。具体的には「イナリ・サーミ」はイナリ・サーミ基礎学習に、「北サーミ語」は外国語としてのサーミ語の基礎学習に対応している。「北サーミ」という学習プログラムは、オウル大学のギエラガス機関との連携の結果である。

表５－１　サーミ教育専門学校の教育内容

		単位（おおよその期間）	主な場所	職業資格の階層
基礎職業資格	クラフトデザイン 宝石･貴金属 サーミハンドクラフト(ハードマテリアル:木材､骨､トナカイ角など) サーミハンドクラフト(ソフトマテリアル:毛皮､革など)	スクールベースの場合180単位(3年間)	イナリ	文化
	自然環境サービス 環境 トナカイ飼育	スクールベースの場合180単位(3年間)	トイヴァニエミ	自然資源と環境
	ホテル､レストラン､ケータリングサービス 料理人	スクールベースの場合180単位(3年間)	イヴァロ	観光、ケータリング、国内サービス
	ビジネス カスタマーサービスとマーケティング	スクールベースの場合180単位(3年間)	イヴァロ	
	ソーシャルケア、ヘルスケア 高齢者向け看護 看護	スクールベースの場合180単位(3年間)	イヴァロ	社会サービス、健康、スポーツ
	ツーリズム ツーリズム	スクールベースの場合180単位(3年間)	イナリ	観光、ケータリング、国内サービス
上級職業資格	野生・自然ガイド		トイヴァニエミ	自然資源と環境
	トナカイ飼育		トイヴァニエミ	自然資源と環境
	サーミハンドクラフト		イナリ	文化
専門職業資格	サーミハンドクラフト		イナリ	文化

		単位（おおよその期間）	主な場所	備　　考
一般教育	サーミ語とサーミ文化	40単位（1年間）	イナリ	
	イナリ・サーミ			
	スコルト・サーミ			
	北サーミ			
	メディアスタディーズ	40＋40単位	イナリ	

備考：サーミ教育専門学校のホームページやサーミ教育専門学校のパンフレットをもとに作成

表５－２　「サーミ語とサーミ文化（北サーミ）」のカリキュラム

	科目名	単位
共通科目	情報技術	1
	学習ポートフォリオ	1
	デジタルコミュニケーション	2
	サーミ文化へのイントロダクション	1
	小計	5
選択科目		4
北サーミ語学習		21
サーミ文化学習	学習旅行	2
	サーミ文化	2
	サーミの伝統食	1
	サーミ文学と口承文化	1
	イナリ・サーミとスコルト・サーミの言語と文化	1
	クラフトデザイン（含：サーミハンドクラフト）	3
	小計	10
合計		40

備考：サーミ教育専門学校のホームページをもとに作成

「北サーミ」の場合を例に具体的なカリキュラムを見てみる。表５－２にそれを整理した。それによれば、共通科目が５単位、選択科目が４単位、北サーミ語学習が21単位、サーミ文化学習が10単位となっている。サーミ文化学習のなかでは、食文化や文学・口承文化・サーミハンドクラフトだけでなく、イナリ・サーミとスコルト・サーミの言語と文化も学習する。また、サーミの土地や職場でサーミ語を用いることに親しむための学習旅行もある。

フィンランドには、言語熟達度検定とよばれる言語の熟達度をはかるテストが存在する（FNBE 2011）。それは、主に成人を対象とし、言語の４技能（読む、書く、話す、聴く）のスキルを評価する。英語、フィンランド語、サーミ語などの９つの言語の検定が行われる。その検定は、就職活動などに活用できる。基礎レベル、中間レベル、上級レベルの３つあり、試験にはそれぞれ90ユーロ、100ユーロ、145ユーロかかる。サーミ教育専門学校は、こうした言語熟達度検定の北サーミ語のテストセンターとなっている。

以上見てきた教育内容は、必ず毎年開講されるわけではない。受講希望者がいれば開講され、いなければ開講されない。その意味で、年度によって開講されている科目が異なる場合がある[5)]。

第４項　ヴァーチャルスクール

先ほどふれたように、サーミ教育専門学校では、そこで行う教育に関連する様々なプロジェクト活動を行うことができる。それによって発展・推進されたものとして、2007年に設置された遠隔教育を提供するヴァーチャルスクールがある。そこでは、サーミ語やサーミ文化の学習プログラム等が提供されている。

このヴァーチャルスクールでは、対面式のクラスルームと同じようなヴァーチャルのクラスルームが設けられる。そして、講義は開始時間と終了時間を設定しリアルタイムで行われる。ただし、講義はweb上に保存され、学生は再度講義を受講しなおすことができる。

現在（2016年１月）、ヴァーチャルスクールでは、「北サーミ語の基礎レベル」（10単位400時間）、「北サーミⅡ（平均レベル）」（10単位400時間）、「イナリ・サーミ語基礎レベル」（4単位160時間）が開講されている。

第３節　サーミ教育専門学校の教員の生活と意識

第１項　調査の概要と基本属性

本節では、サーミ教育専門学校における教育の具体的な担い手としての教員の生活と意識をアンケート調査にもとづいて明らかにする。

アンケート調査は、web アンケートの形式で作成し、サーミ教育専門学校を通してその URL を教員に周知して頂いた。結果として 14 人の教員から回答を得た。教員数は調査時点では 36 人[6)]であり、回収率は 38.9％であった。

はじめに基本的な属性について確認する。表５－３によれば、男性が４人、女性が９人、無回答が１人であった。年齢を見ると、60 歳代が２人、50 歳代が２人、40 歳代が５人、30 歳代が２人となっていた。出身国はすべての者がフィンランドであり、具体的な地域を見ると、イナリ、イヴァロ、ウツヨキなどサーミエリア出身の者が多い。エスニシティを見ると、サーミの方が６人、サーミではない方が６人いる。ただ、サーミではない者のうち３人（No ９、No10、No13）は配偶者がサーミとなっている。本人と配偶者のエスニシティの組み合わせを見ると、本人と配偶者ともにサーミである者はいなかった。また本人と配偶者ともにサーミではない者は３人存在している（No ２、No ３、No ５）。サーミ議会の選挙人名簿に登録している者（６人）は、すべてサーミである者であった。

表５－３　基本属性

No	性別	年齢	出身国	具体的な地名	エスニシティ	配偶関係	配偶者のエスニシティ	サーミ議会の選挙人名簿
1	女	60歳代	フィンランド	イナリ	サーミ	未婚	—	登録している
2	女	無回答	フィンランド	無回答	サーミではない	既婚（含:事実婚）	サーミではない	—
3	女	40歳代	フィンランド	イヴァロ	サーミではない	離死別	サーミではない	—
4	無回答	無回答	フィンランド	無回答	サーミ	既婚（含:事実婚）	サーミではない	登録している
5	女	40歳代	フィンランド	無回答	サーミではない	既婚（含:事実婚）	サーミではない	—
6	男	40歳代	フィンランド	サーミエリア	サーミ	離死別	サーミではない	登録している
7	男	50歳代	フィンランド	ウツヨキ	サーミ	既婚（含:事実婚）	サーミではない	登録している
8	女	30歳代	フィンランド	無回答	サーミ	既婚（含:事実婚）	サーミではない	登録している
9	男	40歳代	フィンランド	ヘルシンキ	サーミではない	既婚（含:事実婚）	サーミ	登録する権利をもっていない
10	女	30歳代	フィンランド	無回答	サーミではない	既婚（含:事実婚）	サーミ	登録する権利をもっていない
11	女	50歳代	フィンランド	無回答	わからない	既婚（含:事実婚）	サーミ	登録する権利をもっていない
12	女	60歳代	フィンランド	無回答	サーミ	未婚	—	登録している
13	女	40歳代	フィンランド	ケミ	サーミではない	離死別	サーミ	登録する権利をもっていない
14	男	無回答	フィンランド	無回答	わからない	既婚（含:事実婚）	サーミではない	無回答

第２項　教員としての特徴

次に、表５－４から教員としての諸特徴を確認しよう。まず、教員資格の有無を確認すると、９人がフィンランドの教員資格を持ち、１人が教員資格はないものの現在職業教員教育大学に通い、３人が教員資格を持っていない。通ったことがある主要な学校･大学を見ると、多くの者が大学（学士課程）や、専門大学（職業学士課程）以上の学位を持っているものの、職業学校までの者も存在している（No ３、No ９）。さらに、具体的な学校・大学を見ると、現在の職場であるサーミ教育専門学校で学んだことがある者が３人いる。さらに、サーミ･ユニバーシティ･カレッジ（ノルウェー）に通ったことのある者も１人存在している。

教員になった西暦を見ると、最も早い者で 1975 年（No １）に、最も遅い者で 2015 年（No13）

から教員になっている。サーミ教育専門学校に勤務し始めた西暦を見ると、No 2が1994年からと最も早くから勤務している。また、最も勤務歴が短いのは2015年から教員になっているNo13である。なお、No 6とNo11を見ると、教員になった西暦よりもサーミ教育専門学校に勤務し始めた西暦の方が早くなっている。これらの者は、教員以外の職員という形でサーミ教育専門学校で働いていたか、もしくは徒弟訓練制の指導員として関わっていたのかもしれない。

サーミ教育専門学校の教員となった理由を見ると、最も多く回答されているのが「これまでのキャリアが生かせるから」で50.0%（7人）、「教育に携わりたかったから」で42.9%（6人）となっており、職業教育訓練機関としての魅力にひかれてサーミ教育専門学校の教員となったことがわかる。ただし、「サーミのために働けるから」も42.9%（6人）、「サーミ文化に関われるから」は28.6%（4人）となっている点にも注目する必要があろう。

また、こうした教員となった理由は、サーミの方とそうではない方とでは異なっている。たとえば、「サーミのために働けるから」を見ると、それを選択した6人のうち5人がサーミの方である一方、他方で「サーミ文化に関われるから」を見ると、それを選択した4人のうち3人が「サーミではない」もしくは「わからない」者である。その意味で、サーミの方ではサーミのために働けるという理由で、そうした者以外ではサーミ文化に関われるからという理由でサーミ教育専門学校の教員となっている。

担当している科目を見てみよう。表5－1のサーミ教育専門学校で提供している教育内容と比べると、6つの基礎職業資格それぞれに関わる教員から偏りがなく回答が得られていることがわかる。また、ヴァーチャルスクールによって提供される遠隔教育を担当している者からも回答を得た。

こうした担当科目は、職業教育訓練機関ということもあり、これまでの職歴や教員以外の現職の仕事と対応している。表5－5を見よう。たとえば、「ツーリスト産業」を担当するNo 1は、「店員･販売員」や「ホテルでの仕事」を経験している。また、「レストラン産業」を担当するNo 9は、教員以外の現職として「料理人」をしている。

それゆえ、「サーミハンドクラフト」や「トナカイ飼育」などを担当している教員も、これまでの職歴や教員以外の現職として、ハンドクラフトやトナカイ飼育を経験している。たとえば、「ハンドクラフト」を担当しているNo 6は、教員以外の現職として「トナカイ飼育、トナカイ角加工」をあげている。また、「トナカイ飼育」を担当しているNo11は、長く従事した仕事として「トナカイ飼育」をあげるとともに、教員以外の現職として「トナカイ飼育」と述べている。

そして、このようにサーミの伝統文化に関連している科目を担当している者の多くは、サーミである（No 6、No 7、No12）。また、「トナカイ飼育」を担当するNo11は、自身のエスニシティをわからないと回答しているものの、配偶者はサーミである。他方で、自身がサーミではないだけでなく配偶者もサーミではない者は、「ツーリズム」「ヘルスケア」「ビジネス」などサーミの伝統文化に関連があるとはいいがたい科目を担当している。

表５－４　教員としての特徴

No	性別	エスニシティ	配偶関係	配偶者のエスニスティ	担当	教師になった年	サーミ教育専門学校(SEI)の勤務年	勤務時間	資格	通ったことがある学校・大学	SEIの教員になった理由						
											教育に携わりたかったから	人に勧められたから	金銭的に魅力があったから	これまでのキャリアが生かせるから	教育方針が気に入ったから	サーミ文化に関われるから	サーミのために働けるから
1	女	サーミ	未婚	―	ツーリスト産業	1975	2011	8-16	フィンランドの教員免許	サーミ教育専門学校、大学(学士課程)、専門大学(職業学士課程)				○			○
2	女	サーミではない	既婚(含:事実婚)	サーミではない	ツーリズム	1978	1994	無回答	フィンランドの教員免許	大学(学士課程)、専門大学(職業学士課程)	○						○
3	女	サーミではない	離死別	サーミではない	ヘルスケア	2014	2014	8-16	ない	職業学校	○						
4	無回答	サーミ	既婚(含:事実婚)	サーミではない	無回答	無回答	無回答	8-16	フィンランドの教員免許	専門大学(職業学士課程)							○
5	女	サーミではない	既婚(含:事実婚)	サーミではない	ビジネス	2013	2013	8-16	フィンランドの教員免許	大学(修士課程)、専門大学(職業学士課程)	○			○			
6	男	サーミ	離死別	サーミではない	ハンドクラフト	1998	1995	8-17	フィンランドの教員免許	大学(学士課程)	○					○	○
7	男	サーミ	既婚(含:事実婚)	サーミではない	サーミハンドクラフト(ハードマテリアル)	2011	2011	無回答	フィンランドの教員免許	サーミ教育専門学校、サーミ・ユニバーシティ・カレッジ(ノルウェー)				○			○
8	女	サーミ	既婚(含:事実婚)	サーミではない	遠隔教育	2004	2004	8-16	フィンランドの教員免許	大学(修士課程)					○		○
9	男	サーミではない	既婚(含:事実婚)	サーミ	レストラン産業	2005	2005	8-16	ない	職業学校	○			○		○	
10	女	サーミではない	既婚(含:事実婚)	サーミ	ソーシャルケア、ヘルスケア	2014	2014	8-16	ない	大学(学士課程)、専門大学(職業学士課程)、専門大学(職業修士課程)		○					
11	女	わからない	既婚(含:事実婚)	サーミ	トナカイ飼育	2009	2006	8-16	フィンランドの教員免許	大学(学士課程)			○	○		○	
12	女	サーミ	未婚	―	サーミハンドクラフト	無回答	2005	8-16と17-21	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答
13	女	サーミではない	離死別	サーミ	ビジネス管理	2015	2015	8-16	ない(現在職業教員教育大学)	大学(修士課程)、専門大学(職業学士課程)				○			
14	男	わからない	既婚(含:事実婚)	サーミではない	いろいろ	2012	2012	8-16	フィンランドの教員免許	サーミ教育専門学校	○			○		○	

表５－５　職業、教員以外の現職、使用言語、言語能力、学習意欲

No	性別	エスニシティ	配偶関係	配偶者のエスニスティ	担当	長く従事した仕事	教員以外の現職	世帯年収	授業を行う際、主にどの言語を使っていますか。	授業以外で学生と接するとき、主にどの言語を使っていますか。	サーミ語	サーミ語能力(自己評価)				サーミ語を習いたいと思いますか。
												A:話すこと	B:読むこと	C:聞くこと	D:書くこと	
1	女	サーミ	未婚	―	ツーリスト産業	教員、会社の事務や営業職、店員・販売員、ホテルでの仕事	なし	40,000～69,999€	フィンランド語	フィンランド語	北サーミ語	2	1	2	2	すでに習っている
2	女	サーミではない	既婚(含:事実婚)	サーミではない	ツーリズム	公務員、教員、	自治体議員	70,000～89,999€	フィンランド語	フィンランド語	北サーミ語	4	2	2	2	習いたい
3	女	サーミではない	離死別	サーミではない	ヘルスケア	看護師	なし	40,000～69,999€	フィンランド語	フィンランド語	―	―	―	―	―	―
4	無回答	サーミ	既婚(含:事実婚)	サーミではない	無回答	教員	なし	40,000～69,999€	フィンランド語	フィンランド語	使えない	―	―	―	―	習いたい
5	女	サーミではない	既婚(含:事実婚)	サーミではない	ビジネス	プロジェクトワーク	プロジェクトワーク	90,000～119,999€	フィンランド語	フィンランド語	―	―	―	―	―	―
6	男	サーミ	離死別	サーミではない	ハンドクラフト	教員	トナカイ飼育、トナカイ角加工	20,000～39,999€	フィンランド語と少しのサーミ語	フィンランド語と少しのサーミ語	北サーミ語	1	1	1	1	習いたい
7	男	サーミ	既婚(含:事実婚)	サーミではない	サーミハンドクラフト(ハードマテリアル)	教員、トナカイ飼育、自営業	自治体議員、トナカイ飼育、トナカイ角加工	70,000～89,999€	サーミ語と少しのフィンランド語	サーミ語と少しのフィンランド語、サーミ語とフィンランド語の半々	北サーミ語	1	1	1	1	すでに習っている
8	女	サーミ	既婚(含:事実婚)	サーミではない	遠隔教育(ヴァーチャルスクール)	公務員	無回答	無回答	フィンランド語と少しのサーミ語	フィンランド語と少しのサーミ語	北サーミ語	無回答	無回答	無回答	無回答	習いたい
9	男	サーミではない	既婚(含:事実婚)	サーミ	レストラン産業	教員	料理人	40,000～69,999€	フィンランド語	フィンランド語	北サーミ語	4	4	3	3	わからない
10	女	サーミではない	既婚(含:事実婚)	サーミ	ソーシャルケア、ヘルスケア	会社の管理職	自営業	～14999€	フィンランド語	フィンランド語	北サーミ語	3	3	3	4	習いたい
11	女	わからない	既婚(含:事実婚)	サーミ	トナカイ飼育	トナカイ飼育	自治体議員、トナカイ飼育、トナカイ食肉加工	無回答	フィンランド語と少しのサーミ語	フィンランド語と少しのサーミ語	北サーミ語	1	1	1	1	すでに習っている
12	女	サーミ	未婚	―	サーミハンドクラフト	保育士、教員、会社の事務や営業職、工員、農業、トナカイ飼育	トナカイ飼育	無回答	サーミ語、フィンランド語と少しのサーミ語、フィンランド語	サーミ語、フィンランド語と少しのサーミ語、フィンランド語	北サーミ語	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答
13	女	サーミではない	離死別	サーミ	ビジネス管理	店員・販売員、自治体の仕事、博物館のカスタマーサービス、ホテル外食産業	自治体の仕事、博物館のカスタマーサービス、ホテル外食産業	20,000～39,999€	フィンランド語	フィンランド語	北サーミ語、イナリ・サーミ語	3	2	2	3	すでに習っている
14	男	わからない	既婚(含:事実婚)	サーミではない	いろいろ	無回答	無回答	無回答	無回答	フィンランド語	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答	無回答

注）話すこと:1流暢に話せる、2かなり話せる、3簡単な内容なら話せる、4ほとんど話せない
読むこと:1本が読める、2簡単な雑誌が読める、3文字が読める、4何も読めない
聞くこと:1議会のやり取りなどがわかる、2日常生活の話題がわかる、3簡単なことならわかる、4ほとんど何もわからない
書くこと:1どんな文章でも書ける、2簡単なメモが書ける、3文字が書ける、4何も書けない

また、サーミの伝統文化に関連している科目では、授業を行う際サーミ語が使われている。ただし、多くの場合、「フィンランド語と少しのサーミ語」という形である。また、これらを担当する教員は授業以外でも学生と話す際には主に「フィンランド語と少しのサーミ語」という形でサーミ語を用いているようだ。他方で、その他の科目ではフィンランド語のみが使用され、かつそれらを担う教員は授業以外でもフィンランド語を使用している。

こうした学校での使用言語とサーミ語能力は対応している。すなわち、授業でサーミ語を使用している教員ほどサーミ語能力が高い(と自己評価している)。たとえば、「サーミハンドクラフト(ハードマテリアル)」を担当するNo 7は、サーミ語に関して、自身を「流暢に話せる」「本が読める」「どんな文章でもかける」「議会のやり取りなどがわかる」と評価している。他方で、「レストラン産業」を担当するNo 9は、自身のサーミ語を「ほとんど話せない」「何も読めない」「文字が書ける」「簡単なことならわかる」と認識している。

ただし、サーミの伝統文化に関連している科目以外の教員の多くは、サーミ語(とくに「北サーミ語」)を使うことはできている。「使えない」と回答している者は1人しか存在していない。そして、そうした者の多くは、サーミ語を「習いたい」もしくはもう「すでに習っている」と回答している。

第3項　家族構成と学習経験

授業などでサーミ語を使用することとサーミ語の能力は対応していた。さらに、これらの点は、家庭で用いる使用言語とも対応している。表5－6を見よう。それによれば、「ハンドクラフト」を担当するNo 6や「トナカイ飼育」を担当するNo12は家庭では主に「サーミ語」を使用している。

そして、このような担当科目や言語能力は、家族構成とも関連している。たとえば、サーミの伝統文化を担当している者または授業でサーミ語を使用している者は、両親ともサーミである者が多い。具体的に見ると、「ハンドクラフト」を担当するNo 6は、「実母」、「実父」だけはなく「母方祖母」「母方祖父」「父方祖母」「父方祖父」もサーミである。ただ、両親がサーミではない者でも配偶者やその両親がサーミであると、授業や家庭でサーミ語を用いる場合もあるようだ(No10、No11)。

サーミ語能力は、家族環境から影響をうけるだけでなく、学校教育からも影響をうけるだろう。そこで、これまで通った学校・大学でサーミ語やサーミ文化を学んだかを見よう。表5－6によれば、サーミではない方6人のうち5人は学校・大学でサーミ語やサーミ文化を学んでいない。ただし、No13は、サーミ教育専門学校とオウル大学でサーミ語とサーミ文化を学んでいる。他方で、サーミの方は、サーミ語やサーミ文化を学んだことがない者は1人(No 4)しかいない。サーミの方の中には、サーミ教育専門学校とサーミ・ユニバーシティ・カレッジ(ノルウェー)でサーミ語とサーミ文化を学んだ者もいる。それは「サーミハンドクラフト(ハードマテリアル)」を担当するNo 7である。さらに、自身のエスニック・アイデンティティを「わからない」とする「トナカイ飼育」を担当するNo11は、サーミ教育専門学校とオウル大学でサーミ語とサーミ文化を学んだ。このように見れば、学校教育での経験も、担当科目や使用言語と関連しているといえるだろう。

なお、子どもの有無を見ると、子どもがいる者は12人となっている。そこで、子どもに対する教育期待を見ると、「大学(上級修士号/博士課程)」など「高い」学歴を回答する者や、「子どもが望むこと」という回答が見られる。ただしここでは、サーミ教育専門学校と回答する者が3人、サーミ・ユニバーシティ・カレッジ(ノルウェー)と回答する者が2人存在していた点を強調しておこう。

表５－６　家族構成と学習歴

No	性別	エスニシティ	配偶関係	配偶者のエスニスティ	担当	授業を行う際、主にどの言語を使っていますか。	ご家族と話すとき、主に何語を使いますか。	サーミである家族	北サーミ語を話せる家族	イナリ・サーミ語を話せる家族	スコルト・サーミ語を話せる家族	子	教育期待	通ったことがある学校・大学	サーミ語を学んだ学校	サーミ文化を学んだ学校
1	女	サーミ	未婚	―	ツーリスト産業	フィンランド語	フィンランド語	実母、母方祖母、母方祖父	実母、母方祖母、母方祖父、きょうだい	いない	いない	無	大学（上級修士号/博士課程）	サーミ教育専門学校、大学（学士課程）、専門大学（職業学士課程）	サーミ教育専門学校	基礎学校
2	女	サーミではない	既婚（含事実婚）	サーミではない	ツーリズム	フィンランド語	フィンランド語	孫（3名）	孫（1名）	孫（1名）	いない	有	サーミ教育専門学校、大学（修士課程）、専門大学（職業学士課程）		ない	ない
3	女	サーミではない	離死別	サーミではない	ヘルスケア	フィンランド語	―	いない	―	―	―	有	専門大学（職業修士課程）	職業学校	ない	ない
4	無回答	サーミ	既婚（含事実婚）	サーミではない	無回答	フィンランド語	フィンランド語	実父	（実父：いずれかの）	（実父：いずれかの）	（実父：いずれかの）	無	サーミ教育専門学校、大学（修士課程）	専門大学（職業学士課程）	ない	ない
5	女	サーミではない	既婚（含事実婚）	サーミではない	ビジネス	フィンランド語	―	いない	―	―	―	有	大学（修士課程）	大学（修士課程）、専門大学（職業学士課程）	ない	ない
6	男	サーミ	離死別	サーミではない	ハンドクラフト	フィンランド語と少しのサーミ語	サーミ語	実母、実父、母方祖母、母方祖父、父方祖母、父方祖父	実母、実父、母方祖母、母方祖父、父方祖母、父方祖父、配偶者	いない	いない	有	サーミ教育専門学校、大学（修士課程）、専門大学（職業学士課程）、サーミ・ユニバーシティ・カレッジ（ノルウェー）	大学（学士課程）	基礎学校、高校	職業教員大学
7	男	サーミ	既婚（含事実婚）	サーミではない	サーミハンドクラフト（ハードマテリアル）	サーミ語と少しのフィンランド語	サーミ語と少しのフィンランド語	実母、実父、母方祖母、母方祖父、父方祖母、父方祖父	実母、実父、母方祖父、父方祖母、父方祖父、配偶者、配偶者の母	父方祖母	いない	有	大学（学士課程）	サーミ教育専門学校、サーミ・ユニバーシティ・カレッジ（ノルウェー）	基礎学校、サーミ教育専門学校、サーミ・ユニバーシティ・カレッジ（ノルウェー）	サーミ教育専門学校、サーミ・ユニバーシティ・カレッジ（ノルウェー）
8	女	サーミ	既婚（含事実婚）	サーミではない	遠隔教育（ヴァーチャルスクール）	フィンランド語と少しのサーミ語	フィンランド語と少しのサーミ語	実母、実父、母方祖母、父方祖母、父方祖父	実母、実父、母方祖母、父方祖母、父方祖父	いない	いない	有	子どもの好みに任せる	大学（修士課程）	基礎学校、高校、大学（学士課程）、大学（修士課程）	基礎学校、高校、大学（学士課程）、大学（修士課程）
9	男	サーミではない	既婚（含事実婚）	サーミ	レストラン産業	フィンランド語	フィンランド語	配偶者の母、配偶者の父、配偶者	いない	いない	いない	有	専門大学（職業学士課程）	職業学校	ない	ない
10	女	サーミではない	既婚（含事実婚）	サーミ	ソーシャルケア、ヘルスケア	フィンランド語	フィンランド語と少しのサーミ語	配偶者の母、配偶者の父、配偶者、子ども	配偶者の母、配偶者の父、配偶者、子ども	いない	いない	有	大学（上級修士号/博士課程）、専門大学（職業修士課程）、サーミ・ユニバーシティ・カレッジ（ノルウェー）	大学（学士課程）、専門大学（職業学士課程）、専門大学（職業修士課程）	ない	ない
11	女	わからない	既婚（含事実婚）	サーミ	トナカイ飼育	フィンランド語と少しのサーミ語	サーミ語とフィンランド語の半々	父方祖母、配偶者の母、配偶者の父、配偶者	配偶者の母、配偶者の父、配偶者	いない	いない	有	無回答	大学（学士課程）	サーミ教育専門学校、オウル大学	サーミ教育専門学校、オウル大学
12	女	サーミ	未婚	―	サーミハンドクラフト	サーミ語、フィンランド語と少しのサーミ語、フィンランド語	サーミ語	実母、実父	実母、実父	いない	いない	有	無回答	無回答	無回答	無回答
13	女	サーミではない	離死別	サーミ	ビジネス管理	フィンランド語	フィンランド語と少しのサーミ語	配偶者の母、配偶者、子ども	いない	配偶者の母、子ども	いない	有	子どもが選んだ選択ならすべて	大学（修士課程）、専門大学（職業学士課程）	サーミ教育専門学校、オウル大学	サーミ教育専門学校、オウル大学
14	男	わからない	既婚（含事実婚）	サーミではない	いろいろ	無回答	無回答	母方祖母	いない	いない	いない	有	子どもが望むこと	サーミ教育専門学校	無回答	無回答

第４項　サーミ教育専門学校への評価

続けて、サーミ教育専門学校への評価を確認しよう。表５－７によれば、サーミ教育専門学校を「A. 専門的な知識や技術が得られる」「D. サーミ文化を身につけられる」と評価する者が100.0%であった[7)]。さらに、表５－８を見ると、サーミ語で学習することやサーミ語を学ぶことを「B. サーミホームランド以外の地域へ進学する際には不利になる」「C. サーミホームランド以外の地域で就職する際には不利になる」「D. サーミホームランド以外の地域で生活する際には不利になる」と評価する者は0.0%であった。その意味で、教員はサーミ教育専門学校を高く評価していよう。

しかし、再度、表５－７に戻ると、「N. サーミ語の授業を増やすべき」が64.3%、「O. サーミ文化の授業を増やすべき」が78.6%となっており、サーミ語やサーミ文化の充実が必要であると評価している。そして、その点に関連して、「M. もっと公的財政支援を増やすべき」も71.4%となっている。

今後、サーミ教育専門学校をどうすべきかと考えているかといえば（表５－９）、「現状でよい」とする者が６人、「増やすべき」が３人、「増やすべき」と「現状でよい」の両者の者が１人であった。「増やすべき」という者についてその自由記述を見ると、「サーミ語とサーミ文化」の履修年限の延長、成人教育の充実、自然資源分野などの拡張が主張されている。他方で、「現状でよい」者からは、「サーミエリアに必要な教育を十分に提供している」という意見が見られるものの、「フィンランドの厳しい経済状況のもとで、十分な形でサーミエリアに必要な教育を提供している。現状を維持することを目的とすべきではないか？」や「フィンランドの財政状況をふまえると、拡充は現実的とはいえない。だが、経済状況が許せば、教育活動を拡大・発展させることができる。」などの意見が見られた。ここからは、フィンランドの経済状況を念頭にして「現状でよい」という評価がなされていると推測される。

表５－７　サーミ教育専門学校への評価

	A.専門的な知識や技術が得られる	B.サーミ語を身につけられる	C.サーミ語で学ぶので理解しやすい	D.サーミ文化を身につけられる	E.サーミの友人ができる	F.サーミ以外の友人との関わりが少なくなる	G.フィンランド語が覚えられない	H.フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない	I.教育設備が整っている	J.サーミ語の教材が整っている	K.進学に有利だ	L.就職に有利だ	M.もっと公的財政支援を増やすべき	N.サーミ語の授業を増やすべき	O.サーミ文化の授業を増やすべき
割合	100.0%	85.7%	71.4%	100.0%	92.9%	7.7%	0.0%	8.3%	92.9%	23.1%	92.9%	85.7%	71.4%	64.3%	78.6%
回答者数	14	14	14	14	14	13	14	12	14	13	14	14	14	14	14

表５－８　サーミ語で学習することやサーミ語を学ぶことへの評価

	A. 理系科目の学習はサーミ語よりもフィンランド語の方がよい	B. サーミホームランド以外の地域へ進学する際には不利になる	C. サーミホームランド以外の地域で就職する際には不利になる	D.サーミホームランド以外の地域で生活する際には不利になる
割合	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%
回答者数	14	14	14	14

サーミの学生たちに将来どのように生活してほしいと考えているかといえば、12人の者（含:「その他」も選択）が「サーミとして積極的に生活してほしい」と考えている。他方で、自身は今後どのように生きていきたいかといえば、「とくに民族は意識せず生活していきたい」が３人、「サーミとして積極的に生活していきたい」が３人、「サーミとして積極的に生活していきたい」と「とくに民族は意識せず生活していきたい」を同時に回答する者が１人存在している。ここで注目したいのは、「サーミとして積極的に生活していきたい」者３人のうち２人がサーミではない（「サーミではない」「わからない」）者だという点である。すなわち、教員の中には、自身はサーミとはいえないものの（「サーミではない」：No10、「わからない」：No11）、将来はサーミとして積極的に生活していきたいと考えている者が存在している。

表５－９　将来展望

No	性別	エスニシティ	配偶関係	配偶者のエスニスティ	担当	今後サーミ教育専門学校を、どのようにすべきだとお考えですか。	サーミの学生たちには、将来どのように生活してほしいとお考えですか。	あなたは今後、どのように生活していきたいと考えていますか。
1	女	サーミ	未婚	–	ツーリスト産業	現状でよい	サーミとして積極的に生活してほしい	サーミとして積極的に生活していきたい
2	女	サーミではない	既婚（含:事実婚）	サーミではない	ツーリズム	現状でよい	サーミとして積極的に生活してほしい	–
3	女	サーミではない	離死別	サーミではない	ヘルスケア	現状でよい	とくに民族は意識せず生活してほしい	–
4	無回答	サーミ	既婚（含:事実婚）	サーミではない	無回答	現状でよい	サーミとして積極的に生活してほしい	とくに民族は意識せず生活していきたい
5	女	サーミではない	既婚（含:事実婚）	サーミではない	ビジネス	増やすべき	サーミとして積極的に生活してほしい	–
6	男	サーミ	離死別	サーミではない	ハンドクラフト	無回答	サーミとして積極的に生活してほしい	サーミとして積極的に生活していきたい、特に民族は意識せず生活していきたい
7	男	サーミ	既婚（含:事実婚）	サーミではない	サーミハンドクラフト（ハードマテリアル）	増やすべき	サーミとして積極的に生活してほしい	とくに民族は意識せず生活していきたい
8	女	サーミ	既婚（含:事実婚）	サーミではない	遠隔教育（ヴァーチャルスクール）	現状でよい	サーミとして積極的に生活してほしい、その他	その他
9	男	サーミではない	既婚（含:事実婚）	サーミ	レストラン産業	増やすべき	サーミとして積極的に生活してほしい	無回答
10	女	サーミではない	既婚（含:事実婚）	サーミ	ソーシャルケア、ヘルスケア	現状でよい	サーミとして積極的に生活してほしい	サーミとして積極的に生活していきたい
11	女	わからない	既婚（含:事実婚）	サーミ	トナカイ飼育	現状でよい	サーミとして積極的に生活してほしい	サーミとして積極的に生活していきたい
12	女	サーミ	未婚	–	サーミハンドクラフト	無回答	サーミとして積極的に生活してほしい	とくに民族は意識せず生活していきたい
13	女	サーミではない	離死別	サーミ	ビジネス管理	増やすべき、現状でよい	サーミとして積極的に生活してほしい、その他	その他
14	男	わからない	既婚（含:事実婚）	サーミではない	いろいろ	増やすべき	その他	無回答

第５項　小括

本節では、サーミ教育専門学校の教員の生活と意識を検討してきた。主要な知見をまとめよう。

まず、サーミ教育専門学校の教員には、サーミの方とそうではない方が存在していた。ただし、第１に、サーミの伝統文化に関連する科目は、主にサーミの方によって担われていた。そして彼らは、授業の中でサーミ語を用い、そのためサーミ語の能力も高かった。そして、自身の両親ともにサーミであるだけでなく、トナカイ飼育やトナカイ角加工などの仕事を経験し、さらに教員以外の現職としてもそうした仕事に携わっていた。サーミではない者もトナカイ飼育を担当してもいたが、その者の配偶者がサーミであり、さらにトナカイ飼育やトナカイ食肉加工を教員以外の現職としてもいた。

他方で、第２に、サーミではない者はサーミの伝統文化に関連する科目ではないものを担当していた。そうした者の中には、自身だけではなく配偶者もサーミではない者も存在していた。ただし、サーミとはいえない者の中にはサーミ文化に関われるからという理由で、サーミ教育専門学校の教員となった者がいた。また、サーミではない教員の多くはサーミ語を使え、さらにその中にはサーミ語をさらに学習する意欲を持つ者もいた。その上、自身がサーミではないものの、将来的にはサーミとして積極的に生活していきたいと考える者も存在していた。

さらに、第３に、サーミ教育専門学校を専門的な知識や技術が得られ、サーミ文化を身につけられる場所として評価していた。そして、サーミ語の学習やサーミ語で学習することは、サーミエリ

ア以外で生活することに関して不利にはならないと考えていた。

ただし、第４に、サーミ語やサーミ語の授業の一層の充実が必要であるとも考えてもいた。とはいえ、こうした充実にはフィンランドの財政状況をふまえて慎重な態度をとっているようにも思える。実際、サーミ教育専門学校は現状でよいと評価する者が多くを占めていた。

第４節　サーミ教育専門学校の学生の生活と意識

第１項　調査の概要と基本属性

続いて、サーミ教育専門学校の学生の生活と意識をアンケート調査にもとづいて明らかにする。

アンケート調査は、教員のアンケート調査と同様に web アンケートの形式で作成し、サーミ教育専門学校を通してその URL を学生に周知して頂いた。結果、42 人の学生から回答を得た。調査時点ではフルタイムの学生が 220 ～ 230 人程度存在し、さらに前述のように徒弟訓練制やコンピテンシーベースの学生がいるので通年で延べ 1,000 人程度の学生が在学している[8)]。これらの点をふまえると回収率は多く見積もっても 19.0％程度となる。その意味で調査結果の一般化には慎重になる必要がある。

まず、基本的な属性を確認する。表５－ 10 から性別を見ると、女性が 70.0％、男性が 30.0％と女性の方が多くなっている。また表５－ 11 から年齢を見ると、若者だけではなく成人を対象とした職業教育訓練機関であることを反映し「10 歳代（16 ～ 19 歳）」が 28.6％、「20 歳代（20 ～ 29 歳）」が 40.0％、「30 歳代（30 ～ 39 歳）」が 22.9％、「40 歳代（40 ～ 45 歳）」が 8.6％となっている。

表５－ 12 －１から出身地を確認すると、フィンランドが 85.7％と多くを占めている。ただ、ロシア・ドイツ・キプロス出身の者がそれぞれ１人ずつ存在してもいる。表５－ 12 －２からフィンランドの具体的な地名を確認してみよう。無回答が 58.3％と多い点には注意する必要があるが、イヴァロが 19.4％と最も多くなっている。この点から、無回答のうちの多くはサーミエリア出身者であると考えることが妥当かもしれない。

表５－ 13 から最も長く従事した仕事を見ると、「店員･販売員」が 20.7％、「会社の事務や営業職」が 17.2％と多く回答されている。ただ、「トナカイ飼育」が 13.8％（４人）、「トナカイ食肉加工」（２人）が 6.9％とサーミの伝統的な職業も一定程度回答されている。

表５－ 14 －１には家族で現在トナカイを飼育しているか否かを整理した。それによれば、「現在飼っている」者が 14.3％（５人）、「かつて飼っていた」者が 11.4％（４人）であることがわかる。また、表５－ 14 －２によれば、自身でトナカイを所有している者は 13.9％（５人）である。ただし、表５－ 14 －３を見ると、トナカイを所有している者のうち「家計の１／４（25％）程度を占める」が 40.0％（２人）、「家計の足しにはならない」が 40.0％（２人）となっており、主要な生計の手段とはいいがたくなっている。

表５－10　性別（除：無回答・不明）

	度数	割合
女性	28	70.0%
男性	12	30.0%
合計	40	100.0%

表５－11　年齢（除：無回答・不明）

	度数	割合
10歳代（16～19歳）	10	28.6%
20歳代（20～29歳）	14	40.0%
30歳代（30～39歳）	8	22.9%
40歳代（40～45歳）	3	8.6%
合計	35	100.0%

表５－12－１　出身地（除：無回答・不明）

	度数	割合
フィンランド	36	92.3%
ロシア	1	2.6%
ドイツ	1	2.6%
キプロス	1	2.6%
合計	39	100.0%

表５－12－２　出身地（フィンランド）（除：無回答・不明）

	度数	割合
無回答	21	58.3%
イヴァロ	7	19.4%
ロヴァニエミ	2	5.6%
オウル	1	2.8%
クーサモ	1	2.8%
ヘルシンキ	2	5.6%
トゥルク	1	2.8%
ハーメリンナ	1	2.8%
合計	36	100.0%

表５－13　最も長い間従事している仕事（除：無回答・不明）

	公務員	保育士	教員	会社の事務や営業職	会社の技術職	工員	トナカイ飼育	トナカイ角の加工	トナカイ食肉加工	店員・販売員	自営業	料理人	法律家	タクシードライバー	その他	無職	学生	回答者計
度数	2	2	1	5	2	1	4	0	2	6	1	1	1	1	2	3	4	29
構成比	6.9%	6.9%	3.4%	17.2%	6.9%	3.4%	13.8%	0.0%	6.9%	20.7%	3.4%	3.4%	3.4%	3.4%	6.9%	10.3%	13.8%	100.0%

表５－14－１　家族でトナカイを飼っているか（除：無回答・不明）

	度数	割合
現在飼っている	5	14.3%
かつて飼っていた	4	11.4%
飼っていない	26	74.3%
合計	35	100.0%

表５－14－２　自身はトナカイを所有しているか（除：無回答・不明）

	度数	割合
所有している	5	13.9%
かつて所有していた	0	0.0%
所有していない	31	86.1%
合計	36	100.0%

表５－14－３　トナカイから得られる収入（除：無回答・不明）

	度数	割合
家計の1／4（25%）程度を占める	2	40.0%
家計の足しにはならない	2	40.0%
無回答	1	20.0%
合計	5	100.0%

表５－15からサーミ・アイデンティティを見ると、自身をサーミであるとみなしている者は、36.6%（15人）であるのに対し、サーミではない者は58.5%（24人）となっている。なお、4.9%（２人）の者が自身をサーミであるか「わからない」と回答している。

家族のなかでサーミの方がいるかを尋ねた表５－16－１を見ると、「実父」がサーミである者が33.3%（13人）、「実母」がサーミである者が15.4%（６人）となっている。また、「父方祖母」が25.6%（10人）、「父方祖父」が25.6%（10人）となっており、父方の家系にサーミである者が多くなっている。また、「配偶者」がサーミである者も15.4%（6人）となっている。

表５－16－２から、家族構成のパターンを見ると、「両親家系ともサーミ」（配偶者もサーミで

ある者も含む）である者が10.3%（４人）、「片親家系のみサーミ」（配偶者もサーミである者も含む）である者が35.9%（14人）となっており、46.2%（18人）の者が自身の親や祖父母がサーミであることがわかる。また、自身の親や祖父母がサーミではないものの配偶者がサーミである者も10.3%（４人）存在している。そして、家族にサーミの者が「いない」者は43.6%（17人）となっている。

表５－15　サーミであるか（除：無回答・不明）

	度数	割合
サーミ	15	36.6%
サーミではない	24	58.5%
わからない	2	4.9%
合計	41	100.0%

表５－16－１　家族のなかに、サーミの者がいるか（除：無回答・不明）

	実母	実父	配偶者の母	配偶者の父	母方祖母	母方祖父	父方祖母	父方祖父	配偶者	養母	養父	回答者計
度数	6	13	3	1	7	3	10	10	6	0	1	39
割合	15.4%	33.3%	7.7%	2.6%	17.9%	7.7%	25.6%	25.6%	15.4%	0.0%	2.6%	100.0%

表５－16－２　家族構成パターン（サーミ）（除：無回答・不明）

	度数	割合
両親家系ともサーミ	4	10.3%
片親家系のみサーミ	14	35.9%
配偶者関係のみ	4	10.3%
いない	17	43.6%
合計	39	100.0%

第２項　サーミ教育専門学校での学習と進学理由

次に、サーミ教育専門学校で学習している内容を見よう。表５－17－１には、サーミ教育専門学校で学習している教育内容を整理した。それによれば、「ビジネス」が38.5%と最も多くなっている。その次に多いのは、「ソーシャルケア、ヘルスケア」の17.9%である。ただ、たとえば、「クラフトデザイン」「サーミ語とサーミ文化（イナリ・サーミ）」「メディアスタディーズ」の３つを学習している者など複数の教育内容を学習している者も存在している。

本章の第２節でふれたようにサーミ教育専門学校では、サーミハンドクラフトやサーミの伝統的な生業であるトナカイ飼育などの学習内容が提供されている。また、本章の補節からはサーミの方の多くは子どもの頃家庭内でトナカイ飼育等の伝統的なサーミ文化に触れており、さらにトナカイ飼育をしている者はそれに関連した文化を体験していたことが示唆されている。これらをふまえるとサーミの方ほど前述のサーミハンドクラフトやトナカイ飼育に関連している内容を学習している可能性がある。

だが、同じく表５－17－１から、サーミの方とそうではない方との違いを見ると、その学習している教育内容に大きな違いが見られるとはいいがたい。さらに、表５－17－２から現在トナカイを所有している者とそうではない者の違いを見ても、学習内容に違いがあるとはいえない。こうした点は、教育内容を「サーミ系」（「自然環境サービス」「クラフトデザイン」「サーミ語とサーミ

文化」）科目とそれ以外の２値に整理して分析しても有意な違いが見られないという意味で確認することができる（表５－17－３、表５－17－４）。以上から、サーミであるかどうか、トナカイを所有しているかどうかという点によって、サーミ教育専門学校で学習する内容には違いが見られない。

表５－17－１　教育内容（除：無回答・不明）

	自然環境サービス	クラフトデザイン	ホテル、レストラン、ケータリングサービス	ソーシャルケア、ヘルスケア	ビジネス	ツーリズム	サーミ語とサーミ文化（北サーミ）	サーミ語とサーミ文化（イナリ・サーミ）	サーミ語とサーミ文化（スコルト・サーミ）	メディアスタディーズ	野生・自然ガイド	準備職業教育	合計
サーミ	0	3	0	3	7	1	1	1	0	2	1	1	15
サーミではない	1	3	1	4	8	1	2	1	0	3	2	2	24
合計	1	6	1	7	15	2	3	2	0	5	3	3	39
サーミ	0.0%	20.0%	0.0%	20.0%	46.7%	6.7%	6.7%	6.7%	0.0%	13.3%	6.7%	6.7%	
サーミではない	4.2%	12.5%	4.2%	16.7%	33.3%	4.2%	8.3%	4.2%	0.0%	12.5%	8.3%	8.3%	
合計	2.6%	15.4%	2.6%	17.9%	38.5%	5.1%	7.7%	5.1%	0.0%	12.8%	7.7%	7.7%	
	p=1.000	p=0.658	p=1.000	p=1.000	p=0.505	p=1.000	p=1.000	p=1.000	p=1.000	p=1.000	p=1.000	p=1.000	

表５－17－２　教育内容（トナカイ所有の有無）（除：無回答・不明）

	自然環境サービス	クラフトデザイン	ホテル、レストラン、ケータリングサービス	ソーシャルケア、ヘルスケア	ビジネス	ツーリズム	サーミ語とサーミ文化（北サーミ）	サーミ語とサーミ文化（イナリ・サーミ）	サーミ語とサーミ文化（スコルト・サーミ）	メディアスタディーズ	野生・自然ガイド	準備職業教育	合計
トナカイを所有している	0	1	0	0	3	1	0	0	0	1	1	1	5
トナカイを所有していない	1	5	1	6	10	1	3	2	0	4	2	2	31
合計	1	6	1	6	13	2	3	2	0	5	3	3	36
トナカイを所有している	0.0%	20.0%	0.0%	0.0%	60.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	20.0%	20.0%	
トナカイを所有していない	3.2%	16.1%	3.2%	19.4%	32.3%	3.2%	9.7%	6.5%	0.0%	12.9%	6.5%	6.5%	
合計	2.8%	16.7%	2.8%	16.7%	36.1%	5.6%	8.3%	5.6%	0.0%	13.9%	8.3%	8.3%	
	p=1.000	p=1.000	p=1.000	p=0.564	p=0.328	p=0.262	p=1.000	p=1.000	p=1.000	p=0.549	p=0.37	p=0.37	

表５－17－３　教育内容（２値）（除：無回答・不明）

	サーミ系科目	
	度数	割合
サーミ	33.3%	15
サーミではない	25.0%	24
合計	28.2%	39

p=0.718

＊サーミ系科目：「自然環境サービス」
「クラフトデザイン」
「サーミ語とサーミ文化」

表５－17－４　教育内容（２値）（トナカイ所有の有無）（除：無回答・不明）

	サーミ系科目	
	度数	割合
所有している	20.0%	5
所有していない	32.3%	31
合計	30.6%	36

p=1.000

次に、表５－18からサーミ教育専門学校への進学理由を見ると、「就職に有利だから」が69.2%、「専門的な知識や技術が得られるから」が76.9%、「資格が得られるから」が53.8%と多く回答されており、資格を取得し就職をするためにサーミ教育専門学校に進学した者が多数であることがわかる。また、「その他」の理由は、「自宅に近いから」が３人、「高校にはいきたくなかったから」が１人、「起業したいから」が１人であった。

ただ、サーミの方とそうではない方との違いに注目すると、サーミの方ほど自身がサーミであるために進学していることがわかる。「自分がサーミだから」を見ると、サーミではない方はいうまでもなく0.0%であるのだが、サーミの方では40.0%となっている。他方で、サーミではない方はどのような理由を重視しているのだろうか。だが、その他に有意な違いが見られた設問はない。しかし、有意な違いとはいえないものの、実践的な教育が充実していることやサーミ文化の学習のために進学している傾向は見られる。「実践的な教育が充実しているから」と「サーミ文化を学びたいから」はともに、サーミの方が20.0%であるのに対し、サーミではない方は45.8%となっているからである（p=0.171）。なお、サーミではない方の中には、「サーミ同士の交流を深めたいから」という進学理由をサーミではない方が選択しているが、これは「サーミの方との交流を深めたいから」という理由で回答したと考えられるかもしれない。

表５－18　進学理由（除：無回答・不明）

	就職に有利だから	専門的な知識や技術が得られるから	資格が得られるから	家業を継ぐため	家族や親族も通っていたから	実践的な教育が充実しているから	自分がサーミだから	サーミ文化を学びたいから	サーミ語の力を高めたいから	サーミ同士の交流を深めたいから	サーミコミュニティのために働きたいから	その他	回答者計
サーミ	12	10	7	2	2	3	6	3	4	1	3	3	15
サーミではない	15	20	14	0	2	11	0	11	6	6	9	2	24
合計	27	30	21	2	4	14	6	14	10	7	12	5	39
サーミ	80.0%	66.7%	46.7%	13.3%	13.3%	20.0%	40.0%	20.0%	26.7%	6.7%	20.0%	20.0%	
サーミではない	62.5%	83.3%	58.3%	0.0%	8.3%	45.8%	0.0%	45.8%	25.0%	25.0%	37.5%	8.3%	
合計	69.2%	76.9%	53.8%	5.1%	10.3%	35.9%	15.4%	35.9%	25.6%	17.9%	30.8%	12.8%	
	p=0.305	p=0.266	p=0.525	p=0.142	p=0.631	p=0.171	p=0.002	p=0.171	p=1.000	p=0.216	p=0.305	p=0.354	

表５－19　進学理由（教育内容２値）（除：無回答・不明）

	就職に有利だから	専門的な知識や技術が得られるから	資格が得られるから	家業を継ぐため	家族や親族も通っていたから	実践的な教育が充実しているから	自分がサーミだから	サーミ文化を学びたいから	サーミ語の力を高めたいから	サーミ同士の交流を深めたいから	サーミコミュニティのために働きたいから	その他	回答者計
サーミ系以外	25	23	20	1	2	9	2	7	4	3	6	3	31
サーミ系	4	9	3	1	2	6	4	7	6	4	6	2	11
合計	29	32	23	2	4	15	6	14	10	7	12	5	42
サーミ系以外	80.6%	74.2%	64.5%	3.2%	6.5%	29.0%	6.5%	22.6%	12.9%	9.7%	19.4%	9.7%	
サーミ系	36.4%	81.8%	27.3%	9.1%	18.2%	54.5%	36.4%	63.6%	54.5%	36.4%	54.5%	18.2%	
合計	69.0%	76.2%	54.8%	4.8%	9.5%	35.7%	14.3%	33.3%	23.8%	16.7%	28.6%	11.9%	
	p=0.019	p=1.000	p=0.043	p=0.46	p=0.277	p=0.158	p=0.032	p=0.024	p=0.011	p=0.063	p=0.305	p=0.593	

＊サーミ系「自然環境サービス」「クラフトデザイン」「サーミ語とサーミ文化」

さらに、表５－19から学習内容別に見ると、「サーミ系」科目とそれ以外で進学理由に違いが見られる。「サーミ系以外」の科目を学習している者ほど、就職や資格取得を理由に進学し、「サーミ系」科目を学習している者ほどサーミ語やサーミ文化を学びたいからという理由で進学している。たとえば、「就職に有利だから」進学した者は、「サーミ系」科目では36.4%であるのに対し、「サー

ミ系以外」の科目では80.6％にもなる。また、「サーミ文化を学びたいから」進学した者は、「サーミ系以外」の科目で22.6％に過ぎないのに対し、「サーミ系」科目では63.6％となっている。

ところで、フィンランドでは、第４章でふれたように、基礎学校や高校・職業学校等で、サーミ語を学習することや、サーミ語を教授言語とすることができる。そこで、サーミ教育専門学校を含めたこれまでの学校教育においてサーミ語やサーミ文化を学習しているのかどうか検討してみよう。表５－20－１にサーミ語の学習経験の有無を整理した。それによれば、サーミ語の学習を「基礎学校」で経験した者は32.4％、「高校」で5.4％、「職業学校（サーミ教育専門学校以外）」で5.4％、「高等教育」で5.4％となっている。さらにサーミ教育専門学校では32.4％の者がサーミ語を学習している。次に、表５－20－２からサーミ文化の学習経験を見ると、サーミ文化の学習を「基礎学校」で経験した者は24.3％、「高校」で8.1％、「職業学校（サーミ教育専門学校以外）」で0.0％、「高等教育」で5.4％、サーミ教育専門学校では21.6％の者がサーミ文化を学習している。

サーミの方とそうではない方を比べると、サーミの方ほど「基礎学校」でサーミ語の学習経験があると判断できる。表５－20－１からサーミ語の場合を見ると、「サーミ」の方が53.3％であるのに対し、「サーミではない」方は21.7％となっているからである。他方で、「サーミ教育専門学校」での学習経験は、「サーミ」の方33.3％、「サーミではない」方30.4％となっており大きな違いが見られない。

こうした点をふまえると、サーミの方にとっては基礎学校で学習したサーミ語をさらに学習する機会として、サーミ以外の方にとっては基礎学校でそれほどふれることができなかったサーミ語を学習する機会として、サーミ教育専門学校は位置づいているともいえよう。

表５－20－１　サーミ語の学習経験（学校教育）（除：無回答・不明）

	基礎学校	高校	職業学校（サーミ教育専門学校以外）	高等教育	サーミ教育専門学校	回答者計
サーミ	8	1	1	1	5	15
サーミではない	5	2	0	1	7	23
合計	13	3	1	2	12	38
サーミ	53.3%	6.7%	6.7%	6.7%	33.3%	
サーミではない	21.7%	8.7%	0.0%	4.3%	30.4%	
合計	34.2%	7.9%	2.6%	5.3%	31.6%	
	p=0.079	p=1.000	p=0.395	p=1.000	p=1.000	

表５－20－２　サーミ文化の学習経験（学校教育）（除：無回答・不明）

	基礎学校	高校	職業学校（サーミ教育専門学校以外）	高等教育	サーミ教育専門学校	回答者計
サーミ	5	2	0	0	3	15
サーミではない	5	2	0	2	5	23
合計	10	4	0	2	8	38
サーミ	33.3%	13.3%	0.0%	0.0%	20.0%	
サーミではない	21.7%	8.7%	0.0%	8.7%	21.7%	
合計	26.3%	10.5%	0.0%	5.3%	21.1%	
	p=0.473	p=1.000	p=0.395	p=0.509	p=1.000	

他方で、表５－20－２から、サーミ文化の学習経験を見ると、「サーミ教育専門学校」での学習経験は、「サーミ」の方20.0％、「サーミではない」方21.7％となっており大きな違いがない。その

意味で、サーミ教育専門学校は、サーミの方とそうではない方に「平等に」学習経験を提供している。他方で、「基礎学校」を見ると、「サーミ」で 33.3%、「サーミではない」で 21.7%となっており、サーミ語の場合と同様、「サーミ」ほど「基礎学校」でサーミ文化を学習しているといえる。ただし、有意な違いとはいえない。それゆえ、サーミ語の学習機会ほどには、サーミの方とそうではない方で基礎学校におけるサーミ文化の学習機会の違いは見られない。

第３項　サーミ教育専門学校への評価

続けて、表５－ 21 － 1 からサーミ教育専門学校への評価を見ると、「A. 専門的な知識や技術が得られる」が 100.0%、「B. サーミ語を身につけられる」が 90.5%、「D. サーミ文化を身につけられる」が 90.0%となっており、職業教育訓練施設やサーミ語や文化の教育機関としてのサーミ教育専門学校の性格が評価されていることがうかがわれる。

ただ、「J. サーミ語の教材が整っている」は 66.7%となっており、サーミ語の教材が不十分であると評価している者も３割程度存在していることがわかる。ただし、表５－ 21 － 2 を見ると、「サーミ語の教材が整っている」が、「サーミ系」科目を学習する者で 100.0%であるのに対し、「サーミ系以外」で 53.6%となっており、「サーミ系」科目を学習している者は教材の整備に関しては十分な評価を与えていると解釈できる。

再度、表５－ 21 － 1 に戻ると、「N. サーミ語の授業を増やすべき」が 40.5%、「O. サーミ文化の授業を増やすべき」が 42.9%となっており、４割程度の者がサーミ語やサーミ文化の学習をより一層増やすべきと考えている。ここで、表５－ 21 － 3 からサーミの方とそうではない方との違いを見ると、「O. サーミ文化の授業を増やすべき」への回答に違いが見られる。すなわち、「サーミ」の方が 20.0%なのに対し、「サーミではない」方が 62.5%となっている。ここからは、サーミ文化に関する授業の充実は、主にサーミではない者によって求められているといえよう。

表５－21－１　サーミ教育専門学校への評価（除：無回答・不明）

	A.専門的な知識や技術が得られる	B.サーミ語を身につけられる	C.サーミ語での学ぶの解で理やすい	D.サーミ文化を身につけられる	E.サーミの友人ができる	F.サーミ以外の友人とわりの関りが少なくなる	G.フィンランド語が覚えられない	Hフィンランドの習慣や文化に触れる機会がない	I.教育が整っている	J.サーミ語の教材が整っている	K.進学に有利だ	L.就職に有利だ	M.もっと公的支援を増やすべき	N.サーミ語の授業を増やすべき	O.サーミ文化の授業を増やすべき
割合	100.0%	90.5%	42.5%	90.0%	81.0%	17.5%	9.5%	11.9%	95.2%	66.7%	89.7%	97.6%	54.8%	40.5%	42.9%
回答者計	42	42	40	40	42	40	42	42	42	42	39	41	42	42	42

表５－21－２　サーミ語の教材が整っている（教育内容２値）（除：無回答・不明）

	サーミ語の教材が整っている	回答者計
サーミ系以外	15	28
サーミ系	11	11
合計	26	39
サーミ系以外	53.6%	
サーミ系	100.0%	
合計	66.7%	
	p=0.007	

表５－21－３　サーミ文化の授業を増やすべき（除：無回答・不明）

	O.サーミ文化の授業を増やすべき	回答者計
サーミ	3	15
サーミではない	15	24
合計	18	39
サーミ	20.0%	
サーミではない	62.5%	
合計	46.2%	
	p=0.019	

表５－22　サーミ語で学習することやサーミ語を学習することについて（除：無回答・不明）

	A.理系科目の学習はサーミ語よりもフィンランド語の方がよい	B.サーミホームランド以外の地域へ進学する際には不利になる	C.サーミホームランド以外の地域で就職する際には不利になる	D.サーミホームランド以外の地域で生活する際には不利になる
割合	61.9%	10.0%	7.5%	12.5%
回答者計	42	40	40	40

表５－22からサーミ語で学習することやサーミ語を学習することについての評価を見ると、「A.理系科目の学習はサーミ語よりもフィンランド語の方がよい」と考える者が61.9％となっており、理科科目はフィンランド語で学習することの方がよいと評価されていることがわかる。その他の設問であるサーミホームランド以外の地域での進学・就職・生活で不利になるかどうかに関しては、不利になると「思う」者は7.5～12.5％程度にすぎず、不利になるとは考えられてはいない。

さらに、表５－23－１から、今後、サーミ教育専門学校が拡充すべきことに関する考えを見ると、「就職に有利となる教育」が35.9％、「専門的な知識や技術を身につける教育」が30.8％、「教育設備・教育環境の整備」が30.8％と、３割程度の者がその拡充を求めている。

サーミの方とそうではない方との違いを見ると、有意な違いは見られない。ただし、割合を見ると、サーミの方は専門的な知識や技術を身につける教育を求めているのに対し、サーミではない方はサーミ文化の理解を深めるための教育を求めているという傾向は見られる。具体的に値を確認すると、たとえば「サーミ文化の理解を深めるための教育」の拡充に関して、「サーミ」の方は0.0％なのに対し、「サーミではない」方は20.8％となっている（p=0.136）。

表５－23－１　サーミ教育専門学校が拡充すべきこと（除：無回答・不明）

	就職に有利となる教育	専門的な知識や技術を身につける教育	資格取得のための教育	家業を継ぐための知識や技術を身につける教育	実践的な教育	サーミ文化の理解を深めるための教育	サーミ語の力の向上のための教育	サーミ同士の交流促進	サーミ以外の人々との交流促進	教育設備・教育環境の整備	その他	回答者計
サーミ	6	7	4	0	5	0	1	3	2	4	0	15
サーミではない	8	5	5	3	5	5	5	8	6	8	1	24
合計	14	12	9	3	10	5	6	11	8	12	1	39
サーミ	40.0%	46.7%	26.7%	0.0%	33.3%	0.0%	6.7%	20.0%	13.3%	26.7%	0.0%	
サーミではない	33.3%	20.8%	20.8%	12.5%	20.8%	20.8%	20.8%	33.3%	25.0%	33.3%	4.2%	
合計	35.9%	30.8%	23.1%	7.7%	25.6%	12.8%	15.4%	28.2%	20.5%	30.8%	2.6%	
	p=0.74	p=0.153	p=0.711	p=0.271	p=0.463	p=0.136	p=0.376	p=0.477	p=0.45	p=0.734	p=1.000	

表５－23－２　サーミ教育専門学校が拡充すべきこと（教育内容２値）（除：無回答・不明）

	就職に有利となる教育	専門的な知識や技術を身につける教育	資格取得のための教育	家業を継ぐための知識や技術を身につける教育	実践的な教育	サーミ文化の理解を深めるための教育	サーミ語の力の向上のための教育	サーミ同士の交流促進	サーミ以外の人々との交流促進	教育設備・教育環境の整備	その他	回答者計
サーミ系以外	10	9	6	2	8	3	5	7	6	11	0	28
サーミ系	4	3	3	1	2	2	1	4	2	1	1	11
合計	14	12	9	3	10	5	6	11	8	12	1	39
サーミ系以外	35.7%	32.1%	21.4%	7.1%	28.6%	10.7%	17.9%	25.0%	21.4%	39.3%	0.0%	
サーミ系	36.4%	27.3%	27.3%	9.1%	18.2%	18.2%	9.1%	36.4%	18.2%	9.1%	9.1%	
合計	35.9%	30.8%	23.1%	7.7%	25.6%	12.8%	15.4%	28.2%	20.5%	30.8%	2.6%	
	p=1.000	p=1.000	p=0.693	p=1.000	p=0.693	p=0.609	p=0.655	p=0.694	p=1.000	p=0.122	p=0.282	

表５－23－２から学習内容別に見ると、ここでも有意な違いは見られない。ただし、割合を見ると、「教育設備･教育環境の整備」を拡充すべきという考えに違いがある。すなわち、「サーミ系」科目を学習している者でそのように回答しているのは 9.1％であるのに対し、「サーミ系以外」科目を学習している者は 39.3％となっており（p = 0.122）、その意味で「サーミ系」科目と比べて、「サーミ系以外」の科目の者は教育設備や環境の整備を求めている。

続けて、表５－24－１から、サーミ教育専門学校への満足度を見ると、すべての項目に対して高い満足度を示していることがわかる。

先ほどふれたように、サーミではない者ほど、「サーミ文化の授業を増やすべき」と考え、さらに有意な違いではないものの、今後「サーミ文化の理解を深めるための教育」を拡充すべきと考えていた。この点をふまえると、サーミの方とそうではない方とでは満足感に違いが見られるとも考えられる。しかし、表５－24－２を見ると、サーミの方とそうではない方では、満足度に有意な違いが見られない。「C. サーミ文化への理解の深まり」を見ると、「サーミ」の方 86.7％、「サーミではない」方 91.3％とむしろ「サーミではない方」の方で満足度が高くなっている。このように見ると、サーミではない方は、サーミ教育専門学校でのサーミ文化に関する教育に関して、高い評価をしつつより一層の充実を求めていると解釈することができるかもしれない。

表５－24－１　満足度（除：無回答・不明）

	A.講義の内容	B.専門的な知識や技術の獲得	C.サーミ文化への理解の深まり	D.サーミ語の力の向上	E.教育設備･教育環境	F.教員との交流	G.学生同士の交流
割合	100.0%	95.2%	85.4%	78.0%	90.2%	100.0%	97.6%
回答者計	42	42	41	41	41	42	42

表５－24－２　満足度（サーミかどうか）（除：無回答・不明）

	A.講義の内容	B.専門的な知識や技術の獲得	C.サーミ文化への理解の深まり	D.サーミ語の力の向上	E.教育設備･教育環境	F.教員との交流	G.学生同士の交流	回答者計
サーミ	15	14	13	11	14	15	14	15
サーミではない	24	23	21	19	22	24	24	24
合計	39	37	34	30	36	39	38	39
サーミ	100.0%	93.3%	86.7%	73.3%	93.3%	100.0%	93.3%	
サーミではない	100.0%	95.8%	91.3%	82.6%	91.7%	100.0%	100.0%	
合計	100.0%	94.9%	89.5%	78.9%	92.3%	100.0%	97.4%	
	—	p=1.000	p=1.000	p=0.687	p=1.000	—	p=0.385	

表５－24－３　満足度（教育内容２値）（除：無回答・不明）

	A.講義の内容	B.専門的な知識や技術の獲得	C.サーミ文化への理解の深まり	D.サーミ語の力の向上	E.教育設備･教育環境	F.教員との交流	G.学生同士の交流	回答者計
サーミ系以外	28	26	24	20	25	28	27	28
サーミ系	11	11	10	10	11	11	11	11
合計	39	37	34	30	36	39	38	39
サーミ系以外	100.0%	92.9%	88.9%	74.1%	89.3%	100.0%	96.4%	
サーミ系	100.0%	100.0%	90.9%	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	
合計	100.0%	94.9%	89.5%	78.9%	92.3%	100.0%	97.4%	
	―	p=1.000	p=1.000	p=0.395	p=0.545	―	p=1.000	

また、有意な違いではないものの「サーミ系以外」科目を学習している者ほど「教育設備・教育環境の整備」を拡充すべきと考えてもいた。それゆえ、そうした者ほど、教育設備や環境の整備に関して不満を感じている可能性もある。そこで、表５－24－３を見よう。そこでは、たしかに「サーミ系以外」科目で89.3%、「サーミ系」で100.0%となっており、「サーミ系以外」科目を学習している者ほど「教育設備・教育環境の整備」の満足感が低い。ただし、それは有意な違いがあるとはいえない。

さらに、表５－25から、サーミ教育専門学校卒業後の進路希望を見ると、「進学」が15.8%、「就職」が52.6%、「未定」が31.6%となっている。「サーミ」の方ほど「進学」を、そうではない方ほど「就職」を希望している傾向は見られるが有意な違いではない。具体的な「進学」希望先を見ると、「サーミ」の方では、サーミ・ユニバーシティ・カレッジ、ラップランド専門大学、オウル大学であり、「サーミではない」方はドイツのBTK大学であった。「就職」の具体的な仕事内容は、おおよそ現在学習している教育内容と対応していた。

表５－26から将来暮らしたい地域（複数回答）を見ると、「イナリ」が60.5%と最も多く回答されている。また、「その他」が21.1%と多いが、その多くが「イギリス」「日本」「中央アメリカ」「海外のどこか」など海外で生活したいという回答であった。

サーミの方とそうではない方との違いを見ると、「サーミではない」方ほど「ウツヨキ」を希望している。ただ、「サーミ」の方の場合は「イヴァロ」や、有意ではないものの「１～３以外のラッピ県」を希望している。

ただし、ここで注目したいのは、多くの者が、将来「イナリ」「ウツヨキ」「イヴァロ」というサーミエリアで生活したいと考えている点である。サーミの方とそうではない方を合わせた合計で見ると92.1%が将来生活したい地域としてそれらの３地域をあげている。その意味で、サーミ教育専門学校の学生は、多くの場合、サーミエリアで将来生活したいと考えている。

また、表５－27には、イナリ、ウツヨキ、ロヴァニエミなどラップランド出身者以外の者を対象に、将来生活したい地域を整理した。それによれば、ラップランド以外の出身者の多くが、イナリやラッピ県で将来生活したいと回答していることがわかる。その意味で、サーミエリア出身ではない者においても、将来サーミエリアで生活したいと考えていることがわかる。

表５－25　サーミ教育専門学校卒業後の進路希望（除：無回答・不明）

	あなたはサーミ専門学校卒業後、どのような進路を考えていますか。			
	進学	就職	未定	合計
サーミ	4	6	5	15
サーミではない	2	14	7	23
合計	6	20	12	38
サーミ	26.7%	40.0%	33.3%	100.0%
サーミではない	8.7%	60.9%	30.4%	100.0%
合計	15.8%	52.6%	31.6%	100.0%
	p=0.268			

表５－26　将来暮らしたい地域（除：無回答・不明）

	1. イナリ	2. ウツヨキ	3. ロヴァニエミ	4. 1～3以外のラッピ県	5. ヘルシンキ	イヴァロ	オウル	その他	回答者計
サーミ	8	0	1	3	1	4	1	2	15
サーミではない	15	7	4	1	2	1	1	6	23
合計	23	7	4	4	3	5	2	8	38
サーミ	53.3%	0.0%	6.7%	20.0%	6.7%	26.7%	6.7%	13.3%	
サーミではない	65.2%	30.4%	17.4%	4.3%	8.7%	4.3%	4.3%	26.1%	
合計	60.5%	18.4%	10.5%	10.5%	7.9%	13.2%	5.3%	21.1%	
	p=0.514	p=0.029	p=1.000	p=0.28	p=1.000	p=0.068	p=1.000	p=0.440	

表５－27　出身地と将来生活したい地域（ラップランド出身者以外）（除：無回答・不明）

出身地	将来生活したい地域
オウル	イナリ
クーサモ	イナリ、ラッピ県（イナリ、ウツヨキ、ロヴァニエミ以外）、日本
ヘルシンキ	イナリ、ラッピ県（イナリ、ウツヨキ、ロヴァニエミ以外）
ヘルシンキ	イナリ、ウツヨキ、ヘルシンキ、ロヴァニエミ北部
ハーメリンナ	イナリ
ロシア	海外
ドイツ	イナリ
キプロス	イナリ、海外

第４項　小括

以上、サーミ教育専門学校の学生の生活と意識を検討してきた。主要な知見をまとめよう。

まず、第１に、サーミであるかどうか、またトナカイを所有しているかどうかによって、学習している教育内容には違いが見られなかった。サーミ教育専門学校では、サーミのハンドクラフトやサーミの伝統的な生業であるトナカイ飼育に関する教育を提供していた点（→第２節）、や、サーミの者の多くは子どもの頃にサーミ文化を経験し、とくに現在でもトナカイ飼育をしている者すべてがそれに関連した文化を経験していた点（→補節）をふまえれば、サーミであるほど、トナカイを所有しているほどそうした教育を求める可能性も考えられる。しかし、そうした傾向は見られなかった。

他方で、第２に、サーミの者の一部は、自身がサーミであるからという理由でサーミ教育専門学校に進学していた。サーミ教育専門学校への進学理由を確認すると、多くの者が就職に有利、専門的な知識や技術、資格取得という理由で進学していた。ただ、サーミの方とそうではない方との違いという点に注目すると、サーミの方ほど自身がサーミであるからという理由で進学していたので

あった。他方でサーミではない方の場合、割合から見れば、サーミ文化を学びたいからという理由でサーミ教育専門学校に入学した傾向が見られた。

この点は、前述のサーミであるかどうか、トナカイを飼育しているかどうかによって学習する教育内容に違いが見られなかった点の背景として存在しているとも考えられる。すなわち、サーミではない方のうち、サーミ文化に関心がありそれを学習したいと考える者がサーミ教育専門学校へと進学するために、サーミか否か、またはトナカイの所有の有無による学習内容の違いが見られないのではないだろうか。

さらに、第３に、これまでの学校教育でのサーミ語やサーミ文化の学習経験を見ると、サーミ教育専門学校においてサーミの方とそうではない方との学習経験には違いがあるとはいいがたかった。他方で、とくに基礎学校におけるサーミ語の学習経験を見ると、サーミの方ほどそれらを学習していた。この点をふまえると、サーミ教育専門学校は、サーミの方にとっては基礎学校でふれた内容をより一層学習する機会として、サーミではない方にとってはこれまで必ずしも十分な形でふれることができなかった内容を学習する機会として位置づいているといえる。

ただし、第４に、サーミではない方ほどサーミの文化の授業を増やすべきと考えていた。さらに、割合から見れば今後サーミ教育専門学校ではサーミ文化の理解を深める教育を拡充するべきとも考えてもいた。ここからは、一見、サーミ教育専門学校において、とくにサーミではない方へ向けたサーミ文化に関する教育が必ずしも十分になされているとはいえない可能性が示唆される。とはいえ、サーミの方とそうではない方とでは、サーミ教育専門学校に対する満足度には大きな違いが見られなかった。むしろ、割合から見ればサーミ文化への理解の深まりに対する満足度は、サーミではない方ほど高かった。こうした点をふまえれば、サーミ教育専門学校におけるサーミ文化の教育は、高く評価されている上でより一層の充実が期待されていると解釈した方がよいと思われる。

他方で、第５に、サーミの伝統文化に関連する内容を学習している者とそうではない者を比べると、割合から見れば、サーミの伝統文化に関連する内容を学習していない者ほど、サーミ教育専門学校の教育設備や教育環境の整備を求めている傾向がうかがわれた。このことは、サーミ教育専門学校においては、サーミの伝統文化に関連しない科目における教育のさらなる充実が求められている可能性を示唆しているかもしれない。

さらに、第６に、サーミ教育専門学校の学生の多くは、将来サーミエリアで生活したいと考えていた。そうした傾向は、ラップランド以外の地域の出身者にも当てはまっていた。このことは、学生がおおよそサーミエリア出身だと考えることが妥当だと考えると、サーミ教育専門学校は、サーミエリアという地域社会レベルの人材の再生産に寄与していると解釈することもできる。その上、ラップランド以外の地域出身者もサーミエリアで将来生活したいと考えていた点をふまえると、そうした者をサーミエリアへと呼び込む働きもしていると解釈することも可能だろう。

おわりに

本章では、サーミ教育専門学校の制度的な特徴、そこで働く教員の生活と意識、そこに通う学生の生活と意識について検討を加えてきた。最後に、主要な知見を確認しつつ、サーミ教育専門学校が果たす役割について考察を加えよう。

サーミ教育専門学校は、サーミエリアに必要な教育を提供すること、サーミ文化や自然にもとづ

いた職業を維持発展させること等を目的として政府によって設置された機関であった。そのために、サーミハンドクラフトやトナカイ飼育などのサーミの伝統文化に関するものやツーリズムなどのサーミエリアの必要性に応じた内容を提供する職業教育訓練や、一般教育としてのサーミ語とサーミ文化の学習プログラムを提供していた。さらには、ヴァーチャルスクールによってサーミ語やサーミ文化に関する遠隔教育を提供してもいた。

こうした教育の具体的な担い手としての教員には、サーミの方とサーミではない方の両者が存在していた。

ただ、第１に、サーミの伝統文化やサーミ語とサーミ文化に関しては、主にサーミの教員によって担われていた。また、彼らは、単にサーミであるというだけではなく、両親ともにサーミであり、これまでトナカイ飼育・トナカイ角の加工・トナカイ食肉加工などの仕事を経験し、教員以外の現職としてもそれらを行ってもいた。加えて、彼らの中にはサーミ教育専門学校やサーミ・ユニバーシティ・カレッジ（ノルウェー）で学んだことのある者もいた。こうしたサーミ文化に関連する科目を担当する教員の中には自身がサーミではない者もいたものの、その者の配偶者はサーミであり、さらにその者はトナカイ飼育などを教員以外の現職としていた。こうした教員によるサーミ文化に関する授業では、サーミ語が教授言語としても部分的に使われていた。

他方で、第２に、サーミ文化に関連しない科目は、自身がサーミではない教員によって主に担われていた。その中には、自身だけでなく配偶者もサーミではない者も存在していた。ただし、サーミとはいえない者の中には、サーミ文化に関わりたいためにサーミ教育専門学校の教員になった者がいた。また、多くの教員が、授業では用いないものの使えるサーミ語があり、さらにはその中には今後サーミ語を習いたいと考える者もいた。その上、自身はサーミではないものの将来はサーミとして積極的に生活していきたいと考える者すら存在していた。

このように見れば、サーミ教育専門学校では、サーミの家系でありかつサーミ文化に深く親しんでいるという意味で「サーミエリート」の者と、自身はサーミではないもののサーミ文化に関心を持つ者という２つのタイプを極例とする教員によって具体的な教育実践が担われていることがわかる。そして、このことは、サーミ教育専門学校が、教員という形で「サーミエリート」とサーミ文化に関心を持つ非サーミの人材の両者を同時に形成するという役割を果たしていることを示唆しよう。

対して、学生を見ると、ここでもサーミの方とそうではない方の両者が存在していた。

その際、注目すべきは、第３に、サーミの学生とそうではない学生で学習内容に異なりが見られないことであった。すなわち、サーミであるほどサーミ文化に関連がある教育内容を学習しているわけではなかった。こうした傾向はトナカイ所有の有無から見ても当てはまった。その背景には、サーミではない学生ほどサーミ文化を学びたいという理由でサーミ教育専門学校に進学していた点が存在している可能性がある。すなわち、サーミではない者のうちサーミ文化を学びたい者がサーミ教育専門学校に進学するため、サーミの学生とそうではない学生の学習内容に違いが見られないのではないか。

そのため、第４に、サーミの学生とサーミではない学生とでは、サーミ教育専門学校におけるサーミ語やサーミ文化の学習経験の程度には違いが見られない。ただし、サーミの方ほど、サーミ語を基礎学校で学習した経験があった。その意味で、サーミの学生とそうではない学生との間には、こ

れまでの生活の中におけるサーミ語やサーミ文化の学習経験のあり方に違いが見られる。

これらの点をふまえると、サーミ教育専門学校は、一方でサーミの方から見ればこれまでにふれてきた学習内容をさらに深める教育機関として、他方でサーミではない方にとってはこれまで必ずしも十分な形で関わることができなかった学習内容にふれる教育機関としての役割を担っていると解釈することもできよう。

さらに、第５に、サーミ教育専門学校の学生の多くは、将来サーミエリアで生活したいと考えていた。そうした傾向は、ラップランド以外の地域の出身者にも当てはまった。学生の出身地域の多くがサーミエリアであると判断することが妥当だとみなすと、サーミ教育専門学校は、サーミエリアという地域社会レベルの人材の再生産に寄与しつつ、さらに、サーミエリア以外の地域から人材を呼び込む役割を担っているとも判断できよう。

ただし、第６に、学生のうちサーミではない者は、サーミの学生と比べて、サーミ文化の授業を増やすべきと考えていた。とはいえ、こうした要求は、彼らのサーミ文化への理解の深まりに関する満足度の高さをふまえると、サーミ教育専門学校におけるサーミ文化の教育を高く評価した上で、より一層の充実を求めていることを意味していると思われる。また、教員もその多くが、サーミ語の授業やサーミ文化の授業を増やすべきと考えていた。ただ、そこには財政状況をふまえるとその拡充は難しいという現実的な認識も存在していると思われる。

加えて、サーミ文化に関連する科目以外を学習している学生は、割合から見れば、サーミ文化に関連する科目を学習している学生と比べて教育設備･教育環境の整備を求めているとも判断できた。このことは、サーミ文化に関連する科目以外において教育条件の課題が存在していることを示唆しているのかもしれない。

とはいえ、いずれにせよ、サーミ教育専門学校は、教員という形で「サーミエリート」とサーミ文化に関心を持つ非サーミの人材を形成しつつ、サーミの学生に対してはサーミ語やサーミ文化をさらに深める学習機会を、サーミではない学生に対してはそれらにふれる学習機会を提供することを通して、サーミエリア社会の再生産に寄与するという役割を担っているといえるだろう。

補節　サーミ系学生におけるサーミ語とサーミ文化

サーミ教育専門学校の学生アンケート調査には、サーミの方もしくは家族にサーミの方がいる方を対象にした設問がある。そこでそれを検討することで、彼らのサーミ語の能力やサーミ文化の経験を確認してみよう。

表５－補－１から、サーミ語を使えるかどうかを見ると、「北サーミ語」を使える者は 68.2%（15人）、「イナリ･サーミ語」を使える者は 18.2%（４人）、「サーミ語は使えない」者は 18.2%（４人）となっている。また「北サーミ語」「イナリ・サーミ語」の両者を使えると回答した者が２人存在している。

サーミ語の能力に関する自己評価を示した表５－補－２を見てみよう。サーミの方もしくは家族にサーミの方がいる方の合計を見ると、サーミ語の能力についてそれほど高くは自己評価していないことがわかる。たとえば、「話すこと」について「流暢に話せる」者は 11.1%（２人）となっている一方で、「ほとんど話せない」者は 61.1%（11 人）となっている。「話すこと」ほどには明確な傾向は見られないものの、「読むこと」「聞くこと」「書くこと」も同様の傾向がうかがえる。

「両親家系ともサーミ」「片親家系のみサーミ」「配偶者関係のみ」別に見ると、「配偶者関係のみ」の者で言語能力の低い者が多くなっている一方、「両親家系ともサーミ」の者ほど言語能力を高く評価する者が多くなっている。

なお、ここで注意を払う必要があるのは、たとえ、自身がサーミであるか、家族にサーミの方がいなくとも、サーミ語を使用することができる者が存在することである。先ほどふれたように、本節で用いるサーミ語を使えるかどうか等の設問は、サーミの方もしくは家族にサーミの方がいる方を対象にしたものであった。しかし、サーミではない方もしくは家族にサーミの方がいない方の中に、該当する設問への回答を行ってくれた者もいた。その回答を見ると、「北サーミ語」と「ルレ・サーミ語」を使用できると回答した者が１人、「北サーミ語」と「イナリ・サーミ語」を使用できると回答した者が１人、「北サーミ語」のみを使用できると回答した者が４人存在していた。

表５－補－１　サーミ語を使えるか（除：無回答・不明）

	北サーミ語	イナリ・サーミ語	スコルト・サーミ語	サーミ語は使えない	回答者計
両親家系ともサーミ	3	2	0	0	4
片親家系のみサーミ	10	2	0	3	14
配偶者関係のみ	2	0	0	1	4
合計	15	4	0	4	22
両親家系ともサーミ	75.0%	50.0%	0.0%	0.0%	100.0%
片親家系のみサーミ	71.4%	14.3%	0.0%	21.4%	100.0%
配偶者関係のみ	50.0%	0.0%	0.0%	25.0%	100.0%
合計	68.2%	18.2%	0.0%	18.2%	100.0%

続けて、表５－補－３から家族の中にサーミ語を話せる者がいるかどうか確認しよう。そこからは、「実父」がサーミ語を話せる者は 27.3%（６人）、「父方祖母」が 22.7%（５人）、「父方祖父」が 18.2%（４人）、「きょうだい」が 18.2%（４人）となっている。

ここで留意しておくべきは、家族のなかでも、サーミであるからといって必ずしもサーミ語が話せるわけではない者が存在している点である。同じく表５－補－３には、サーミである家族のうちサーミ語を話せる者を分子に、サーミである家族を分母にして算出した割合も示してある。それによれば、いくつかの場合、100.0％ではなくその意味で、サーミであるといってもサーミ語を話すことができない家族が存在していることがわかる。

加えて、サーミではないもののサーミ語を使うことができる者が存在している点にも注意を払う必要がある。具体的には「片親家系のみサーミ」の「母方祖父」を見ると、200.0％となっている。この「母方祖母」の配偶者である「母方祖父」がサーミであり、かつサーミ語話者であったために、この「母方祖母」はサーミ語を話せていたと思われる。このことは、サーミではないもののサーミ語を使うことができる家族の存在を示唆しよう。

こうした点は、自身がサーミではないか、もしくは家族にサーミがいない方の家族の場合にもあてはまる。たとえば、「私たちの家族はサーミではありませんが、両親、きょうだい、私はサーミ語を使うことができます」と回答している者がいた。また、サーミではない実母がサーミ語を使用できると回答した者が１人、サーミではない配偶者がサーミ語を使用できると回答している者が１人存在してもいた。

表５－補－２　サーミ語の能力（自己評価）（除：無回答・不明）

両親家系ともサーミ		話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
できる	1	1	1	1	1
	2	0	0	1	1
	3	1	1	1	1
できない	4	1	0	0	0
合　計		3	2	3	3

話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
33.3%	50.0%	33.3%	33.3%
0.0%	0.0%	33.3%	33.3%
33.3%	50.0%	33.3%	33.3%
33.3%	0.0%	0.0%	0.0%
100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

片親家系のみサーミ		話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
できる	1	1	1	1	1
	2	1	6	4	4
	3	3	2	5	3
できない	4	6	2	1	3
合　計		11	11	11	11

話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
9.1%	9.1%	9.1%	9.1%
9.1%	54.5%	36.4%	36.4%
27.3%	18.2%	45.5%	27.3%
54.5%	18.2%	9.1%	27.3%
100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

配偶者関係のみ		話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
できる	1	0	0	0	0
	2	0	0	0	0
	3	0	0	2	1
できない	4	4	4	2	3
合　計		4	4	4	4

話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
0.0%	0.0%	50.0%	25.0%
100.0%	100.0%	50.0%	75.0%
100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

合計		話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
できる	1	2	2	2	2
	2	1	6	5	5
	3	4	3	8	5
できない	4	11	6	3	6
合　計		18	17	18	18

話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
11.1%	11.8%	11.1%	11.1%
5.6%	35.3%	27.8%	27.8%
22.2%	17.6%	44.4%	27.8%
61.1%	35.3%	16.7%	33.3%
100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

注）話すこと　1　流暢に話せる
2　かなり話せる
3　簡単な内容なら話せる
4　ほとんど話せない

読むこと　1　本が読める
2　簡単な雑誌が読める
3　文字が読める
4　なにも読めない

聞くこと　1　議会のやり取りなどがわかる
2　日常生活の話題がわかる
3　簡単なことならわかる
4　ほとんど何もわからない

書くこと　1　どんな文章でも書ける
2　簡単なメモが書ける
3　文字が書ける
4　何も書けない

なお、表５－補－４からサーミ語を話せる家族を言語別に見ると、北サーミ語を話せる家族が最も多くなっていることがわかる。また、回答者自身には、スコルト･サーミ語を話せる者がいなかったものの、スコルト・サーミ語を話せる家族が存在していることもわかる。

さらに、表５－補－５から家族と話すときの言語を確認すると、80.0％と多くの者が「フィンランド語」と回答している。「サーミ語」の者が0.0％、「サーミ語と少しのフィンランド語」の者が5.0％と、家族の会話の中ではサーミ語はあまり使われてはいないようだ。

表５－補－３　サーミ語を使える家族（除：無回答・不明）

	実母	実父	配偶者の母	配偶者の父	母方祖母	母方祖父	父方祖母	父方祖父	配偶者	養母	養父	きょうだい	曾祖父	回答者計
両親家系ともサーミ	0	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	2	1	4
片親家系のみサーミ	2	5	1	0	3	2	3	3	1	0	0	2	0	14
配偶者関係のみ	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4
合計	2	6	2	1	3	2	5	4	3	0	0	4	1	22
両親家系ともサーミ	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	25.0%	100.0%
片親家系のみサーミ	14.3%	35.7%	7.1%	0.0%	21.4%	14.3%	21.4%	21.4%	7.1%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	100.0%
配偶者関係のみ	0.0%	0.0%	25.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	9.1%	27.3%	9.1%	4.5%	13.6%	9.1%	22.7%	18.2%	13.6%	0.0%	0.0%	18.2%	4.5%	100.0%

サーミの家族（一部再掲）	実母	実父	配偶者の母	配偶者の父	母方祖母	母方祖父	父方祖母	父方祖父	配偶者	養母	養父	回答者計
両親家系ともサーミ	4	4	0	0	4	2	3	3	0	0	0	4
片親家系のみサーミ	2	9	2	0	3	1	7	7	2	0	1	14
配偶者関係のみ	0	0	1	1	0	0	0	0	4	0	0	4
いない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
合計	6	13	3	1	7	3	10	10	6	0	1	39

サーミ語を話せる者/サーミの家族	実母	実父	配偶者の母	配偶者の父	母方祖母	母方祖父	父方祖母	父方祖父	配偶者	養母	養父
両親家系ともサーミ	0.0%	25.0%	－	－	0.0%	0.0%	66.7%	33.3%	－	－	－
片親家系のみサーミ	100.0%	55.6%	50.0%	－	100.0%	200.0%	42.9%	42.9%	50.0%	－	0.0%
配偶者関係のみ	－	－	100.0%	100.0%	－	－	－	－	50.0%	－	－
いない	－	－	－	－	－	－	－	－	-	－	－
合計	0.0%	1.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.0%	2.5%	0.0%	－	0.0%

表５－補－４　サーミ語を使える家族（言語別）（除：無回答・不明）

北サーミ語	実母	実父	配偶者の母	配偶者の父	母方祖母	母方祖父	父方祖母	父方祖父	配偶者	養母	養父	きょうだい	曾祖父	回答者計
両親家系ともサーミ	1	2	0	0	1	1	3	2	0	0	0	1	0	4
片親家系のみサーミ	2	2	1	0	3	2	1	3	2	0	0	1	0	14
配偶者関係のみ	0	0	2	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4
合計	3	4	3	1	4	3	4	5	4	0	0	2	0	22
両親家系ともサーミ	25.0%	50.0%	0.0%	0.0%	25.0%	25.0%	75.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	100.0%
片親家系のみサーミ	14.3%	14.3%	7.1%	0.0%	21.4%	14.3%	7.1%	21.4%	14.3%	0.0%	0.0%	7.1%	0.0%	100.0%
配偶者関係のみ	0.0%	0.0%	50.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	13.6%	18.2%	13.6%	4.5%	18.2%	13.6%	18.2%	22.7%	18.2%	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	100.0%

イナリ・サーミ語	実母	実父	配偶者の母	配偶者の父	母方祖母	母方祖父	父方祖母	父方祖父	配偶者	養母	養父	きょうだい	曾祖父	回答者計
両親家系ともサーミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	4
片親家系のみサーミ	1	3	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	14
配偶者関係のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
合計	1	3	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	1	22
両親家系ともサーミ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	25.0%	100.0%
片親家系のみサーミ	7.1%	21.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
配偶者関係のみ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	4.5%	13.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.5%	4.5%	100.0%

スコルト・サーミ語	実母	実父	配偶者の母	配偶者の父	母方祖母	母方祖父	父方祖母	父方祖父	配偶者	養母	養父	きょうだい	曾祖父	回答者計
両親家系ともサーミ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	4
片親家系のみサーミ	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	14
配偶者関係のみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
合計	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	22

両親家系ともサーミ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
片親家系のみサーミ	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
配偶者関係のみ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	4.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

表５－補－５　家族の使用言語（除：無回答・不明）

	サーミ語	サーミ語と少しのフィンランド語	サーミ語とフィンランドを半々	フィンランドと少しのサーミ語	フィンランド語	その他	回答者計
両親家系ともサーミ	0	0	1	0	3	0	4
片親家系のみサーミ	0	1	0	2	9	2	12
配偶者関係のみ	0	0	0	0	4	0	4
合計	0	1	1	2	16	2	20
両親家系ともサーミ	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	75.0%	0.0%	100.0%
片親家系のみサーミ	0.0%	8.3%	0.0%	16.7%	75.0%	16.7%	100.0%
配偶者関係のみ	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
合計	0.0%	5.0%	5.0%	10.0%	80.0%	10.0%	100.0%

次に、サーミ文化に関してはどのような経験をしているのだろうか。表５－補－６―１から、子どもの頃にサーミの伝統文化を体験した者の割合を見ると、68.2%（15 人）の者が子どもの頃に伝統的なサーミ文化を経験したことがわかる。家族構成ごとに見ると、「両親家系ともサーミ」で 100.0%、「片親家系のみサーミ」で 76.9%、「配偶者関係のみ」で 33.3%となっており、両親ともにサーミであるほどサーミ文化を経験している。

表５－補－６－２から具体的な内容を見ると、トナカイ飼育、漁労、ベリー採集、民族衣装、伝統食などが経験されてきたことがわかる。トナカイ飼育に関しては具体的な内容を答えてくれた者のうち７人がそれに関する文化を経験したと述べている。なお、現在でも自身でトナカイを所有している者は、すべて子どもの頃にトナカイ飼育を経験している。

表５－補－６－１　子どもの頃にサーミ文化を経験したか（除：無回答・不明）

	ある	回答者計
両親家系ともサーミ	4	4
片親家系のみサーミ	10	13
配偶者関係のみ	1	3
合計	15	20
両親家系ともサーミ	100.0%	
片親家系のみサーミ	76.9%	
配偶者関係のみ	33.3%	
合計	75.0%	

表５－補－６―２　子どもの頃にサーミ文化を経験したか（文化の内容）（除：無回答・不明）

サーミの民族衣装や装飾品。言語の巣でサーミ文化のいくつかについて触れた。正規の授業外だが基礎学校でもサーミ文化を学んだことがある
うちの家族はトナカイ飼育をしている。伝統的な食事もした。父は場合によってサーミの民族衣装を着ているし、現在、私もそうしている。（現在トナカイ所有）
生計手段、経済的な交換、トナカイ飼育、漁労、ベリーの採集、ライフスタイルなど。だが、今現在ではそういったことは難しい。ちなみに、フィンランドの学校や職場でアウトサイダーとして感じたことはない。
狩猟と漁労。森林ツアー。キャンプファイヤーやバーベキュー。中等教育レベルの学校に通っていたころまで。
トナカイ飼育と漁労。トナカイ飼育は父がなくなった10歳の時まで。漁労はいまでも続けている。
我が家はトナカイ飼育をしてきている。また伝統的な漁労も行ってきた。さらに伝統的なクラフトワークにも親しんできた。（現在トナカイ所有）
サーミ語を教えられた。ただ、あまり詳しくは覚えていない。４歳の時に父と母が離婚し、母と一緒にフィンランドの南の方へいったので。サーミ文化には主に父を通して接触していた。
漁労とそれから得られる食べ物。我が家はトナカイ飼育をしてきた。おばあちゃんと母はハンドクラフトをしていた。（現在トナカイ所有）
トナカイ飼育に関する様々な事柄（現在トナカイ所有）
自然が近くにあったのでベリー採集と漁労。これはまだ続けている。キャンプファイヤーをして団らんの時間を過ごした。
トナカイ飼育。（現在トナカイ所有）
現在、学校では、食べ物、服装、物語などサーミ文化に触れることができる。

表５－補－７から、自身の親がどのように生きていたかを見ると、「とくに民族は意識せず生きてきた」が最も多い。たとえば、母親の場合を見ると、「とくに民族は意識せず生きてきた」者は66.7%（４人）存在している。ただ、「サーミであることを知られないように生きてきた」者も母親の場合16.7%（１人）、父親の場合25.0%（３人）存在することにも注目しておいた方がよいかもしれない。なぜなら、表５－補－８から、自身は将来どのように生きていきたいかを見ると、「サーミであることを知られないように生きていきたい」と考える者は0.0%になっているからである。その意味で、親世代と比べるとサーミであることに対して否定的な意識はより一層少なくなっている。

表５－補－７　親はどのように生きていたか（除：無回答・不明）

		サーミとして積極的に生きてきた	特に民族は意識せずに生きてきた	サーミであることを知られないように生きてきた	回答者計
母親	度数	2	4	1	6
	割合	33.3%	66.7%	16.7%	100.0%
父親	度数	3	9	3	12
	割合	25.0%	75.0%	25.0%	100.0%

＊複数の選択肢に回答している者がいるため各カテゴリの総和は100%を超える

表５－補－８　将来、どのように生きていきたいか（除：無回答・不明）

	サーミとして積極的に生きていきたい	特に民族は意識せずに生活していきたい	サーミであることを知られないように生活していきたい	その他	回答者計
両親家系ともサーミ	0	2	0	2	4
片親家系のみサーミ	3	7	0	1	11
合計	3	9	0	3	15
両親家系ともサーミ	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	100.0%
片親家系のみサーミ	27.3%	63.6%	0.0%	9.1%	100.0%
合計	20.0%	60.0%	0.0%	20.0%	100.0%

表５－補－９　差別の経験（除：無回答・不明）

	ある	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	ない	わからない	回答者計
両親家系ともサーミ	1	0	2	1	4
片親家系のみサーミ	0	5	8	1	14
配偶者関係のみ	0	0	2	1	3
合計	1	5	12	3	21
両親家系ともサーミ	25.0%	0.0%	50.0%	25.0%	100.0%
片親家系のみサーミ	0.0%	35.7%	57.1%	7.1%	100.0%
配偶者関係のみ	0.0%	0.0%	66.7%	33.3%	100.0%
合計	4.8%	23.8%	57.1%	14.3%	100.0%

こうした意識は、サーミであることに起因した差別経験の少なさと関連しているように思える。表５－補－９から、サーミであることを理由に差別されたり、そうした差別を見聞きしたことがあるかどうかを見ると、自身に対する差別の経験がある者は 4.8%（１人）となっている。また、「自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている」者は 23.8%（５人）いるが、その内容を尋ねた自由回答を見ると、

「年配の世代の方には、若い時に差別を受けていたようだ。それは基本的には精神的なレベルのものだが、時折暴力的なレベルのものもあったようだ。」

「父はサーミであることを禁止された。父はフィンランド語を学ばなければならず、サーミ語を否定しなければならなかった。父はサーミであることを恥だと感じていた。」

などのように、過去の差別を見聞きしており、その意味で現在において多くの差別を見聞きしているわけではないと思われる。

注

１）本節の記述は主に FNBE（2010、2015a）と Eurypedia を参考にした。
２）フィンランドの徒弟訓練制に関しては、新井（2015）を参照のこと。
３）資格の詳細については、FNBE（2011）を参照のこと。
４）本節の記述は主にサーミ教育専門学校のホームページやサーミ教育専門学校のパンフレット（http://www.sogsakk.fi/hotel/Yhteinen/Tiedotus/Yleisesitteet/Sakk_yleisesite_englanti.pdf）を参考した。なお、日本語でサーミ教育専門学校を紹介している文献としては中田（2008）がある。
５）実際、2015 年８月から始まる学期において「サーミ語とサーミ文化」のうち「スコルト・サーミ」は、受講希望者が少なかったため開講されなかった（サーミ教育専門学校のホームページ参照）。
６）サーミ教育専門学校に訪問時のヒアリング調査から（2015 年８月 19 日）。
７）４点尺度の回答選択肢（「そう思わない」「あまりそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」）を２点尺度（「そう思わない」「あまりそう思わない」→「思わない」、「ややそう思う」「そう思う」→「思う」）にしたもののうち、「思う」者の度数と割合を示した。

８）注６）と同様。

参考文献

新井吾郎 , 2015,「フィンランドにおける徒弟訓練――徒弟訓練と職業資格の関係を中心に」『技術教育学の探究――科研費中間報告書（その１）』12, 36-51.

ReferNet Finland, 2011, *Finland.VET in Europe Country Report 2010*（Thessaloniki, Greece, CEDEFOP）.

Finnish national board of education（FNBE）, 2010, *Vocational education and training in Finland*（http://www.oph.fi/download/131431_vocational_education_and_training_in_finland.pdf）

――――, 2011, *WOULD YOU LIKE AN OFFICIAL CERTIFICATE OF YOUR LANGUAGE SKILLS?*（http://www.oph.fi/download/141133_would_you_like_an_official_certificate_of_your_language_skills.pdf）.

――――, 2012, *Supplement: Upper secondary vocational qualifications, further qualifications and specialist qualifications*（http://www.oph.fi/download/131431_vocational_education_and_training_in_finland.pdf）.

――――, 2015a, *FINNISH VET in a nutshell*（http://www.oph.fi/download/165770_finnish_vet_in_a_nutshell.pdf）

――――, 2015b, *Teachers in Finland – statistical brochure*（http://www.oph.fi/download/166755_teachers_in_finland_statistical_brochure.pdf）

――――, 2015c, Finnish education in a nutshell（http://www.oph.fi/download/146428_Finnish_Education_in_a_Nutshell.pdf）.

福田誠治, 2012,『フィンランドはもう「学力」の先を行っている――人生につながるコンピテンス・ベースの教育』亜紀書房.

中田篤, 2008,「フィンランドにおけるトナカイ牧畜とイナリ地方のサミ文化関連施設の現状について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』17：47-48.

Stevenson, C.B, 2001, *Modern Indigenous Curriculum：Teaching Indigenous Knowledge of Handicraft at Sami College in Finland and Norway*（National Library of Canada）.

Svein L, 2000, *Adult Education and Indigenous Peoples in Norway*（UNESCO Institute for Education）.

吉田欣吾, 2005,「フィンランド」渋谷謙次郎編『欧州諸国の言語法』三元社 , 379-435.

吉村博明, 1993,「サーミ関連立法――フィンランドを中心に」『外国の立法』32（２・３）, 39-70.

インターネット資料

サーミ教育専門学校のホームページ http://www.sogsakk.fi/

Eurypedia, Finland https://webgate.ec.europa.eu/fpfis/mwikis/eurydice/index.php/Finland:Redirect

（上山浩次郎）